

# ヴォルテールのクレビヨン批判 における演劇美学

渋谷直樹

## I. はじめに

ヴォルテールは、18世紀「フランスのソフォクレス」と呼ばれていた悲劇作家クレビヨンの5作品、『アトレウスとテュエステス』、『エレクトラ』、『セミラミス』、『カティリーナ』、『三頭政治』に対抗するため、同じ題材を取り上げ自ら創作した。このような彼の挑戦は、クレビヨン悲劇に対する劇作術・作詩法の面での批判から生まれたものであった。ところが彼がクレビヨンの戯曲に対抗していたという事実ばかりが先行し、2人の人間関係を軸とした研究が中心となっている。例えばアンリ・リヨン、ポール・ルクレール、シモーヌ・グジョー＝アルノドーは、2人が仲違いをした理由やその時期について歴史的背景を基に論を進めている<sup>1)</sup>。またリヨン、ルクレールに加えヘンリー・カーリントン・ランカスターでは、ヴォルテールがクレビヨンに抱いていたのは、嫉妬なのかそれとも憤慨なのかという感情論も議論の対象となる<sup>2)</sup>。これに関連してイ

---

1) Henri Lion, *Les Tragédies et les théories dramatiques de Voltaire*, Paris, 1895 : Genève, Slatkine Reprints, 1970, pp. 170-192 ; Paul O. LeClerc, *Voltaire and Crébillon père : history of an enmity*, repris dans *Studies on Voltaire and the eighteenth century*, 115, Oxford, Voltaire Foundation, 1973, pp. 15-16, 39-62, 71-79, 81-106 et 117-136 ; Simone Gougeaud-Arnaudeau, *Crébillon le Tragique (1674-1762)*, L'Harmattan, 2013, pp. 115-118 et 129-141.

2) Henri Lion, *op. cit.*, pp. 178-179 ; Paul O. LeClerc, *op. cit.*, pp. 58-60 ; Henry Carrington Lancaster, *French tragedy in the time of Louis XV and Voltaire 1715-1774*, t. II, Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1950, p. 333.

ザベル・ドゥゴークは、最終的にヴォルテールの思いは、ライバルを擁護していたルイ15世とボンパドゥール夫人が自分を失墜させようとしているのではないか、という王と寵姫への不信感にまで変わったと強調している<sup>3)</sup>。一方彼の挑戦そのものについてルクレーレは、クレビヨンが没した1762年以降のヴォルテールの行動はとりわけ無駄な努力であったと一蹴し、ランカスターに至っては、彼の挑戦的な態度はクレビヨンを世論から追放することができなかつたばかりか、ヴォルテール自身の名声をも高めることさえできなかつたと結論づけている<sup>4)</sup>。このように彼の挑戦は、劇作術・作詩法に関する彼の考えを軸としてではなく、クレビヨンの態度から引き起こされたヴォルテールの感情を中心に議論がなされているのが目立つと言えよう。

もちろんこれらの論者や他の批評家にも、ヴォルテールの演劇論を土台として彼の挑戦を考察する姿勢は見られる。ドゥゴークは『セミラミス』を、クリフトン・チェルバックは『セミラミス』と『オレステス』(『エレクトラ』)を採り上げている<sup>5)</sup>。ルクレーレとミシェール・マツ＝アスカンでは『オレステス』と共に、それぞれ『救われたローマ』(『カティリーナ』)、『ペロプスの子孫たち』(『アトレウスとテュエステス』)の2作品が考察の対象となっている<sup>6)</sup>。さらにリヨンは『セミラミス』、『オレステス』、『救われたローマ』を、ランカスターはリヨンの3作品に『三

---

3) Isabelle Degauque, *Les Tragédies de Voltaire au miroir de leurs parodies dramatiques : d'Œdipe (1718) à Tancrede (1760)*, Honoré Champion, 2007, p. 282.

4) Paul O. LeClerc, *op. cit.*, p. 150 ; Henry Carrington Lancaster, *op. cit.*, p. 360.

5) Isabelle Degauque, *op. cit.*, pp. 397-398 [*Sémiramis*] ; Clifton Cherpach, *The Call of Blood in French Classical Tragedy*, Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1958, pp. 107-110 [*Sémiramis et Oreste*].

6) Paul O. LeClerc, *op. cit.*, pp. 96-100 [*Rome sauvée*] et p. 104 [*Oreste*] ; Michèle Mat-Hasquin, *Voltaire et l'Antiquité grecque*, Oxford, Voltaire Foundation, 1981, pp. 161-162 [*Oreste*] et 167-168 [*Les Pélopidés*].

頭政治』を加えた4作品を論じている<sup>7)</sup>。だがこれらの批評のどれもが、クレビヨンの劇作術・作詩法に対する不満は示されるものの、そのように批判するヴォルテールの理由が明らかにされていない、という共通点を持っている。そして結局は悲劇の内容よりも、上演に至るまでの経緯や当時の上演の状況に焦点が当てられている。つまりそこでは彼の演劇論はもはや問題となっていないのである。確かに自分になされたクレビヨンの態度や、宮廷内でのライバルの厚遇に対する恨みと妬みとが、ヴォルテールに挑戦の気持ちを奮い立たせたことは間違いないであろう。しかしだからといって、反感を持ったことがきっかけで、ライバルの悲劇を非難するためにヴォルテールがこじつけで演劇論を打ち立てた訳ではない。もともと彼にはクレビヨンの悲劇を非とする持論が存在していたのであり、その見解は生涯を通じて変わることはなかった。そしてその批判の対象となったのが、ギャラントリー（色恋話）の挿入と悔悟の念の欠如であり、それらは恐れと憐れみの問題へと通じていくであろう。実際こうした考えはアリストテレスの演劇論の骨子である以上、ヴォルテール独自の考え方とは言えないが、それは劇作術の面で、彼が18世紀の自国の演劇に対しギリシア悲劇への回帰を希求していたことに起因している。同時に作詩法の面では、クレビヨンの文体への批判を通じて、フランス悲劇における韻文の重要性を訴えるヴォルテールの真意を読み取ることができる。だからこそ、彼には欠点と思われる要素で満たされていたライバルの悲劇は、自分の悲劇論を訴えるための手段としては最適だったのである。したがって彼の態度は個人的な恨みというよりも、フランス古典悲劇の栄光を取り戻そうという切実な願いから来していると言える。そう考えればヴォルテールの挑戦は決して無駄であったとは言えない。以下本論の流れとしては、先ず両者の関係をより良く理解する

---

7) Henri Lion, *op. cit.*, pp. 199-200 [*Sémiramis*], 206-208 [*Oreste*] et 211-215 [*Rome sauvée*] ; Henry Carrington Lancaster, *op. cit.*, pp. 335-336 [*Sémiramis*], 339-340 [*Oreste*], 349-353 [*Rome sauvée*] et 358-359 [*Le Triumvirat*].

ために、2人にまつわる出来事を概観する。次に批判の対象となるクレビヨンの悲劇を検証したのち、これらの非難は2人が対立する以前のヴォルテールの演劇理論に基づいたものであり、さらに彼の見解は生涯を通じて堅持されたという事実を明らかにする。最後にクレビヨンの韻文詩への批判にも着眼し、ヴォルテールにおける韻文詩の重要性を分析する。これらの考察で彼の批判はクレビヨン個人を越え、フランス悲劇向上のための主張であったということが明らかになると思われる<sup>8)</sup>。

## II. ヴォルテールとクレビヨンの確執

まだ悲劇作家としてデビューする前の1716年かあるいは1717年に、ヴォルテールはクレビヨンのパトロンであったオジエールの邸宅で初めて彼と出会った。その時の状況を伝える記録は残されていないものの、クレビヨンの名前がヴォルテールの書簡の中に初めて現れたのは1716年夏である。そこではジャン＝バチスト・ルソーによって擲揄されたクレビヨンを、ヴォルテールが庇っているのが見られる<sup>9)</sup>。実際これは彼の勘違いだったのであるが、クレビヨンに対する好意を示すものであり、1723年にはクレビヨンの悲劇をヴォルテールは楽しみにしていたほどであっ

8) 本論ではヴォルテールの引用に関しては、以下の略号を用いる。Voltaire (François Marie Arouet, dit), *Œuvres complètes de Voltaire*, Oxford, Voltaire Foundation, 1968- (OC) ; *Œuvres complètes de Voltaire*, éd. Louis Moland, Garnier-Frères, 1877-1885, 50 + 2 vol. (M) ; *Correspondance*, éd. Theodore Besterman, Gallimard, coll. « Bibliothèque de La Pléiade », 1977-1993, 13 vol. (GC) . なお個々の作品に編者がそれぞれいる場合は、初出のみ校訂者を記し、演劇の引用では幕(ローマ数字)、場(算用数字)、行数と共に話者も示す。また作品のタイトルの後の年数は、作品自体の初演、執筆もしくは出版の年を表すものであり、引用の下線はすべて筆者による。

9) Lettre à Jean-François Lériget de La Faye, été 1716, GC, t. I [1977], p. 42. Cf. Jean-Baptiste Rousseau, « Épître à Clément Marot », dans *Œuvres de Jean-Baptiste Rousseau*, t. I, « Épître III », éd. l'abbé Séguy, Bruxelles, chez François Didot, 1743, p. 404.

た<sup>10)</sup>。また7年後の1730年にヴォルテールは、クレビヨンが彼のイギリス亡命のきっかけとなったロアン騎士に会い、『ブルトウス』を失敗させるための陰謀を企んでいたという噂を耳にしたものの、彼はその行為を重大なこととは受け取ってはいなかった<sup>11)</sup>。その証拠に同じ年クレビヨンと共に、当時アカデミー会員であったラ・モットを攻撃するために2人は手を組んでいたからである。翌1731年にはクレビヨンをリシュリュー公爵に紹介するために公爵の自宅へと連れて行き、クレビヨンがその場で朗読した『カティリーナ』の断片を「大変美しく思われた<sup>12)</sup>」とヴォルテールは称賛している。そして1733年にクレビヨンは生涯務めることとなる検閲官に任命される。その就任後間もなくしてヴォルテールは、自作の『趣味の殿堂』という風刺詩を認可してもらうため、まずはクレビヨンの息子で小説家のクロード＝プロスペール・ジョリオ・ド・クレビヨンに原稿を送り、多少の訂正を彼の父親から求められたにもかかわらず、むしろ好意的であり5日後には出版が認められた<sup>13)</sup>。さらに1735年に彼が『趣味の殿堂』の再版を望んだ際、今回は初版の時とは違ってクレビヨンが彼の詩を勝手に削除してしまう。しかしながら、翌年の1736年にヴォルテールは悲劇『アルジール』の前口上で検閲官を称えている。

---

10) Lettre à François-Augustin Paradis de Moncrif, 24 septembre 1723, *GC*, t. I, p. 116.

11) Lettre à Nicolas-Claude Thieriot, janvier 1730, *GC*, t. I, p. 248. ちなみに1703年のクレビヨンの処女作は上演を拒否されたのではあるが、ヴォルテールの『ブルトウス』と同じ主題を扱った『ブルトウスの子供たちの死』であった。またギュスターヴ・デノワールテールはクレビヨンの人柄について述べている。「怠惰で不精で陰謀には適さない気質であるクレビヨンは、自分の悲劇のこと以外のことでは、それほど邪悪な策謀をもつれさせるような人間ではなかった。」Gustave Desnoiresterres, *Voltaire et la société française au XVIII<sup>e</sup> siècle*, t. 1, « La jeunesse de Voltaire », Didier, 1867, chap. XI, pp. 414-415.

12) Lettre à Pierre-Robert Le Cornier de Cideville, 19 août 1731, *GC*, t. I, p. 291.

13) Lettres à François-Augustin Paradis de Moncrif, vers le 5, vers le 8 et 11 avril 1733, *GC*, t. I, p. 412, 412-413 et 414.

私の心が妬ましく思うことは不可能なことです。私はそのことを『ラダミストゥス』と『エレクトラ』の著者に訴えます。彼はこの2つの作品によって、[…] 同じ道を進みたいという気持ちを私に吹き込んだ最初の人でした。彼の作品が成功したとしましても、彼の戯曲の上演中に感動のあまり私が流した涙とは別の「感情を持ち合わせた」涙を、決して私に流させはしませんでした。彼が私の内に競争心と友情しか生じさせない、ということを知っているのです<sup>14)</sup>。

確かに観客を前にして演劇の上演前に読まれるものであるだけに、たとえ大袈裟ではあるにしても相手を褒め称えるのは当然のこととはいえ、この口上にはまだ相手を揶揄しようとする悪意は込められていないと思われる。なぜなら7ヶ月後にヴォルテールは、ジャン＝バチスト・ルソーに対して一緒に戦おうとクレビヨンに呼びかけているからである<sup>15)</sup>。このように1730年代の2人の関係は良好であったように思われる。

ところが1741年を機に2人の関係に亀裂が生じる。その原因はクレビヨンがヴォルテールの悲劇『ムハンマド』の上演を拒否したからである。結局、マルヴィル警察長官とフルーリー枢機卿の介入でどうにか『ムハンマド』は翌年に上演されたが、自分の意向を無視されるという形となったクレビヨンは、1743年のヴォルテールの『カエサルの死』に対し韻文を修正することで上演を許すという措置をとる。しかし作者がこの条件を断ったために上演は禁止となってしまったのである。ヴォルテールは『カエサルの死』に対するこの態度について、1707年に上演されたクレビヨンの『アトレウスとテュエステス』を引き合いに出して不満を述べている。「ブルートゥスはカエサルを殺害すべきではないと彼 [=クレビヨン] は主張しています。[…] しかし彼はかつて実の父親 [=テュエ

14) *Alzire, ou Les Américains*, « Discours préliminaire », éd. Theodore E. D. Braun, OC, t. 14 [1989], pp. 122-123.

15) Lettre à Berger, vers le 15 août 1736, GC, t. I, p. 806.

ステス] に舞台上で息子 [=プリステーン] の血を飲ませたのです<sup>16)</sup>。] クレビヨン自身の悲劇では『カエサルの死』よりもさらに陰惨な場面が舞台上で演じられているのに、どうして自分の作品では禁じられるのか、ヴォルテールは納得できないのである。さらに彼は検察官としてのクレビヨンの在り方について論している。「彼 [=クレビヨン] は自分の作品に多少関連性のある作品の上演を阻止したがっている、というあまりにも多くの人が抱いている疑いに対し、彼はこの疑念を晴らさねばならないと私には思われるのです<sup>17)</sup>。」クレビヨンの行為は恣意的で検察官という権力の濫用でしかないとヴォルテールは憤慨しているのが見て取れる。おまけにこの検閲官は、『カエサルの死』の作者が訂正を断ったために上演を禁止したはずの悲劇に対し、自分の好きなように韻文を修正したあげく上演までしてしまったのであった。実際このクレビヨンの手によってなされた改訂版の悲劇は成功には至らなかった。こうした事情から2人の間に対立が始まり、ポール・ルクレールはとりわけこの『ムハンマド』と『カエサルの死』の上演禁止が、ヴォルテールとクレビヨンの訣別の直接的な原因だったと強調している<sup>18)</sup>。

だがこの検閲官による行為はそれだけでは済まされなかった。1744年にはヴォルテールが「処罰に値する軽蔑すべき著作<sup>19)</sup>」と告発していた作品が、本人の与り知らぬところで『ヴォルテール氏による王の征服についてのオード』という題名のもと、クレビヨンの出版認可によって流布されたのである。そしてライバルの対抗作品の一弾として、1746年5月から創作が始められ2年後に完成を見た『セミラミス』に対して、またもやクレビヨンは上演を認めないという手段を講じた。この検閲官の振る舞いに、「この憐れな男はかつて持っていた僅かながらの理性までも失

16) Lettre à Marie-Françoise Dumesnil, 4 juillet 1743, *GC*, t. II [1977], p. 730.

17) *Ibid.*, p. 731.

18) Paul O. LeClerc, *op. cit.*, p. 60.

19) Lettre à Claude-Henri Feydeau de Marville, 22 octobre 1744, *GC*, t. II, p. 919.

ってしまいました<sup>20)</sup>」と、ヴォルテールは姪のドゥニ夫人に嘆いている。結局『セミラミス』は1748年8月に初演を迎えたが、この時も彼にとっては絶対に必要であった重要な6行の韻文が、クレビヨンによって恣意的に削除された形で上演される結果となった<sup>21)</sup>。これと同時に『セミラミス』に関しては別の問題も浮上し、ヴォルテールの怒りをさらにクレビヨンは買うこととなる。1743年以来パロディーは禁止されていたにもかかわらず、ビドー・ド・モンティニーの『セミラミス』に、クレビヨンはイタリア座での上演認可を与えたのである。ヴォルテールは検閲官の行いを皮肉っている。「このことに関する全てにおいて、クレビヨンは卑劣なやり方で振る舞いました。いやむしろ、パロディーさえも授かることのできなかった、できの悪い作品である『セミラミス』の作者にはとても相応しい行動だったのです<sup>22)</sup>。」クレビヨンの『セミラミス』とパロディーの関係を揶揄しながら、彼は自らを慰めている。別のところでも「彼 [=クレビヨン] の行いは彼の戯曲よりも100倍もひどいものなのです<sup>23)</sup>」と、ヴォルテールはライバルの作品を引き合いに出し批判していた。そして『ムハンマド』と『カエサル之死』の上演拒否を、2人の訣別が始まった直接的な原因と主張していたポール・ルクレールに対し、アンリ・リヨンはこのクレビヨンによるパロディーの容認こそが両者の確執の直接的要因であると捉えている<sup>24)</sup>。

20) Lettre à Mme Denis, 27 juillet 1748, *GC*, t. II, p. 1237. さらにヴォルテールは、「もしクレビヨンが別人のような人であったのであれば、私はずっと以前から悲劇を彼に献じていたことであろうに」と検閲官の人格を悔やんでいる。Lettre à la comtesse d'Argental, 25 février 1748, *GC*, t. II, pp. 1208-1209.

21) Lettre à Nicolas-René Berryer de Ravenoville, 30 août 1748, *GC*, t. II, p. 1244.

22) Lettre au comte d'Argental, 7 novembre 1748, *GC*, t. II, p. 1286.

23) Lettre au comte d'Argental, 25 décembre 1748, *GC*, t. II, p. 1303. 『セミラミス』のパロディーの認可に関して、ヴォルテールは他の書簡でも繰り返している。Voir Lettre à Nicolas-René Berryer de Ravenoville, 24 octobre : Lettre à François-Thomas-Marie de Baculard d'Arnaud, 3 novembre 1748, *GC*, t. II, p. 1279 et 1283-1284.

24) Henri Lion, *op. cit.*, pp. 176-177 et 185.



その上ヴォルテールにとっては芳しくないことが、『セミラミス』の件と並行して起こっていた。前年の1747年からクレビヨンは宮廷で厚遇されるようになり、とりわけポンパドゥール夫人のお気に入りとなった。この一事がライバルの他の悲劇にも挑戦しようという対抗意識をヴォルテールに芽生えさせることとなる。これについてポール・ルクレールは、彼がクレビヨンと同じ作品を創作し続けたのは、ポンパドゥール夫人とライバルとの関係を嫉む気持ちからではなく、自分よりも劣った劇作家が自分の作品を抑圧したり、自分を中傷するパンフレットやパロディを認可したりすることへの激怒からである、と至る所で力説している<sup>25)</sup>。確かに史実的には、クレビヨンが夫人から優遇される1年前からすでにヴォルテールは『セミラミス』を書き始めている以上、この戯曲が嫉妬から生まれた作品であるとは言えまい。だがクレビヨンの悲劇に対抗するための2作目となる『オレステス』以降の作品は、彼が嫉妬心に駆られて創作した可能性は十分に考えられる。というのもヴォルテールは次のように述べているからである。「我々は『カティリーナ』と『三頭政治』を擁護したことしか、彼女 [=ポンパドゥール夫人] を非難することはできないでしょう<sup>26)</sup>。」この引用で見られる『カティリーナ』とは、クレビヨンが20年も前から書き始め、夫人の励ましを受け1748年になってようやく完成し同年末に上演された悲劇である。その公演直後にヴォルテールは『救われたローマ』の創作を決め、翌月には『エレクトラ』に対抗すべき『オレステス』までもほめかしている<sup>27)</sup>。おまけに彼は言っていた。「あなた [=ポンパドゥール夫人] が、私のアカデミーの同僚であり、私の最初の師匠であるクレビヨン氏から受け取られた『カティリーナ』の書簡体献呈文は、彼の感謝の気持ちから生まれた金字塔だっ

25) Paul O. LeClerc, *op. cit.*, pp. 15-16, 55, 60, 116, 124-126 et 148-149.

26) Lettre à Jean-François Marmontel, 21 mai 1764, *GC*, t. VII [1981], p. 709.

27) Lettre à Frédéric II, 17 mars 1749, *GC*, t. III [1975], p. 32.

たのです<sup>28)</sup>。ライバルが『カティリーナ』をルイ15世の寵姫に捧げたのに対し、今度はヴォルテールが自作の悲劇『タンクレード』を侯爵夫人に献呈することとなる。これは彼が2人の関係を意識していた何よりの証でもある。またこの引用にある「私の師匠」という言葉は、すでに1750年の『オレステス』の上演前にヴォルテールが俳優のリブーに語らせた口上に見られる。ただこの場合は3人称なので「彼の師匠<sup>29)</sup>」となっている。もちろんこの「師匠」という言葉は皮肉である。彼はダルジャンタル侯爵夫妻に本音を明かしている。

「私の師匠クレビヨン」。フレロンが真面目に受け取っている愉快な冗談。それでも侯爵夫人 [=ボンパドゥール夫人] が認めていたものを、あまり改悪させてはなりません。あなたは「私が自分の主人と見なしていた」と思いたいのですか？ 礼儀正しさはタダですし、常によい効果を生み出すものなのです<sup>30)</sup>。

フレロンとはヴォルテールを目の敵にしていた『文芸年鑑』の編集長であるが、この告白に彼の打算的な態度と悪意とがはっきりと読み取れる<sup>31)</sup>。そして彼がいかにボンパドゥール夫人とクレビヨンとの関係を強く意識していたかということの証拠として、2人について言及された書簡

28) *Tancredé*, « À Madame la marquise de Pompadour » [1760], éd. John S. Henderson et Thomas Wynn, *OC*, t. 49B [2009], p. 127.

29) *Oreste*, « Discours », éd. David Jory, *OC*, t. 31A [1992], p. 524.

30) Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 26 novembre 1760, *GC*, t. VI [1980], p. 106. 翌年の書簡でも彼は「私の師匠クレビヨン」とからかっている。Lettre au comte d'Argental, 1<sup>er</sup> avril 1761, *GC*, t. VI, p. 330.

31) ヴォルテールが初めて「師匠」と口にするのは1746年5月のアカデミーの入会演説の時である。*Discours de Monsieur de Voltaire à sa réception à l'Académie française* [1746], éd. Karlis Racevskis, *OC*, t. 30A [2003], p. 30.

をあらゆる所で見出すことができる<sup>32)</sup>。何より1750年にプロシアのフリードリヒ2世のもとへと旅立ったヴォルテールは当時のことを思い出しながら、「私はクレビヨンの『カティリーナ』が存在するフランスから逃げたのです<sup>33)</sup>」と告白していた。これらのことを考慮すれば、ヴォルテールがクレビヨンに対し果たし状を投げつけた一因として、同じ劇作家としての嫉妬心も排除することはできないものと思われる。

一方クレビヨンの方も検閲官という権力を濫用することを決してやめなかった。一連の『セミラミス』事件に続いて、もともとイタリア座で1728年に上演されたジャック・デュヴォールの『偽学者』という喜劇が、1749年に『家庭教師の情夫』という改題のもと再演された。この戯曲ではヴォルテールと彼の愛人であったシャトレ侯爵夫人が槍玉にあげられていた。つまりクレビヨンはまたしても、彼を侮辱するような喜劇に上演を許したのであった<sup>34)</sup>。その上1751年には、ちょうど10年前に上演を拒否された『ムハンマド』の再演を試みた際、クレビヨンによって再度禁止の憂き目に遭う。だがこの時はこの戯曲に興味を示していたリシュリュエ公爵が、クレビヨン以外の者を検閲官として選ぶようにとダランソン侯爵に命じ、その結果ダランベールが選出され無事に再演された。

---

32) Voir *Lettre à Mme Denis*, 18 janvier 1749 : *Lettre au duc de Richelieu*, 27 janvier 1752, *GC*, t. III, p. 15 et 593 ; *Lettre au comte d'Argental*, 6 octobre 1754, *GC*, t. IV [1978], p. 257 ; *Lettre aux comte et comtesse d'Argental*, 1<sup>er</sup> février 1762, *GC*, t. VI, p. 783 ; *Lettres aux comte et comtesse d'Argental*, 13 avril 1763, 27 mars et 23 avril 1764 : *Lettre à Gabriel Cramer*, vers le 30 avril 1764, *GC*, t. VII, p. 210, 640, 669 et 676 ; *Lettre au duc de Richelieu*, 27 mai 1767, *GC*, t. VIII [1983], p. 1152 ; *Lettre à Henri-Louis Lekain*, 27 janvier 1769, *GC*, t. IX [1985], p. 768. さらにボンパドゥール夫人の弟であるマリニーがライバルのために霊廟建設の提案をした時、ヴォルテールは「私の場合には建ててはくれないでしょう」と皮肉っている。*Lettre aux comte et comtesse d'Argental*, 16 décembre 1762, *GC*, t. VI, p. 1138.

33) *Lettre au duc de La Vallière*, 21 février 1767, *GC*, t. VIII, p. 967.

34) *Lettre aux comte et comtesse d'Argental*, 23 août ; *Lettre à Mme Denis*, 23 août 1749, *GC*, t. III, p. 89 et 90.

反対に締め出しを喰ったクレビヨンの中では、ヴォルテールに対する恨みが増大する。そのためか1755年には彼の悲劇『支那の孤児』の韻文の削除の命令が言い渡された。さらに1760年にこの検察官は、フェルネーの長老を代表として啓蒙の世紀を築くこととなるフィロゾフたちを嘲弄した、パリソーの喜劇『哲学者たち』に上演の許可を与えたのである。この行為に対しヴォルテールは彼の後を継いで修史官となったデュクロに訴えている。

あなたが老いぼれのクレビヨンに過ちを悟らせたことは賞賛に値します。[...]『ラダミストゥス』と『エレクトラ』の著者が、文学には恥辱となるような戯曲を卑劣にも認可していたとは、私は知りませんでした。それは真の文人たちのおぞましい迫害者らの仲間入りをするということです [...]。彼らが分裂させ打ちのめそうと躍起になっている、フィロゾフたちの正しさを証明し彼らのための復讐をあなたが成し遂げられますように<sup>35)</sup>。

劇作家であると共にフィロゾフであることを自負しているヴォルテールにとっては、この喜劇を書いたパリソーも許せないが、それに上演許可を与えたクレビヨンの行為も容認できないのであった。最後にこの検閲

---

35) Lettre à Charles Pinot Duclos, 22 octobre 1760, *GC*, t. VI, p. 35. 彼はあらゆる所でクレビヨンを「老いぼれのクレビヨン」(Lettre à la duchesse de Saxe-Gotha, 29 janvier 1755, *GC*, t. IV, p. 359)、「老いぼれの狂人」(Lettre à Pierre-Robert Le Cornier de Cideville, 23 janvier 1755, *GC*, t. IV, p. 346 ; Lettres aux comte et comtesse d'Argental, 28 octobre 1761, 4 janvier 1762 et 13 juillet 1763, *GC*, t. VI, p. 647, 745 et t. VII, p. 303 ; Lettres à Étienne-Noël Damilaville, 28 octobre et vers le 1<sup>er</sup> novembre 1761, *GC*, t. VI, p. 648 et 654 ; Lettre au duc de Richelieu, 25 janvier 1778, *GC*, t. XIII [1993], p. 151)、「憐れな老いぼれの狂人」(Lettre au comte d'Argental, 11 octobre : Lettre aux Étienne-Noël Damilaville et Nicolas-Claude Thieriot, 11 octobre 1761, *GC*, t. VI, p. 616 et 617) と形容していた。

官は、上演を拒否した1761年のヴォルテールの喜劇『領主の権利』に、自分で数多くの変更をした上に全く新しい幕までも加えてから上演を認可した。クレビヨンに改悪された喜劇を見たヴォルテールはもちろん憤激している。「このクレビヨンはフィロゾフではありません！ […] 彼は『ムハンマド』に対して行った時と同じ下らない卑劣な言動を、『領主の権利』にもしたのです。彼は『ムハンマド』を禁ずるために宗教を口実にし、今回は習俗を言い訳にしたのです<sup>36)</sup>。」演劇というものを啓蒙のために役立てようと努めていたからこそ、劇作家は常にフィロゾフでなければならない、とヴォルテールは信じていた。そう考えれば彼においてクレビヨンは、フィロゾフでないどころか、真の劇作家でもないと言える。こうした見解の中にも、ヴォルテールがクレビヨンに対して挑戦し続けた彼の真意が窺われるのである。そして翌1762年にヴォルテールは『領主の権利』を『賢人の障害』という題名に改めて、コメディーフランセーズで上演したが、それから5ヶ月後にクレビヨンは没した。したがって一時的に解任された時もあったが、彼は死の直前まで検閲官の職務をいい意味でも悪い意味でも全うしたと言えよう。一方ヴォルテールは彼が亡くなった後も、1764年には『三頭政治』を、1771年には『ペロプスの子孫たち』を創作し、同時に故人への批判も続けるのであった。さて次章では彼のクレビヨン悲劇に対する批判とその対象となる場面を考察したい。

### Ⅲ. クレビヨンの劇作術への批判

#### 1. 憎むべき両家の恋愛

ヴォルテールが事あるごとに繰り返していた、1708年上演のクレビヨ

---

36) Lettre aux Étienne-Noël Damilaville et Nicolas-Claude Thieriot, 11 octobre 1761, *GC*, t. VI, p. 617. 『ムハンマド』の上演禁止について、晩年もヴォルテールは繰り返している。Lettre à Jean-François de La Harpe, 25 février ; Lettre aux comte d'Argental et autres, 2 mars 1772, *GC*, t. X [1986], p. 960 et 962.

ンの『エレクトラ』に対する見解から見よう。この悲劇では、アガメムノンの娘であるエレクトラと息子のオレステスが、一家の敵であるアイギストスの息子イティスと娘イピアナッサとそれぞれ愛し合うという、2つの恋愛話が展開されている。ヴォルテールはエレクトラの人物について、1749年にダルジャンタル侯爵夫妻への書簡で言っている。「彼 [=サン=ランベール] が『エレクトラ』を唾棄すべき作品と見なしている男であるということを、あなたは知っていますか? [...] エレクトラが恋をしているとは<sup>37)</sup> !」ヴォルテールは、詩人であり彼と同じようにシャトレ侯爵夫人の愛人でもあったサン=ランベールの意見を引き合いに出し、自分の考えの正当性を夫妻に認めさせようとしている。次に彼は当時のギリシアの劇場に目を向け「どうして恋をするエレクトラがアテネで大成功を取めることができるのでしょうか<sup>38)</sup>」と疑問を投げかける。では実際そこに描かれたエレクトラとはどのような人物であったのか。彼女は戯曲の初めからすでに愛と義務の間で心が揺れ動き嘆いている。

彼女 [=クリュタイムネストラ] の夫 [=アイギストス] が待っている祭壇に、  
 私たちを侮辱する彼と共に恋人 [=イティス] を生贄として捧げに行きましょう。  
 [...]

37) Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 28 août 1749, *GC*, t. III, p. 93.

38) *Dissertation sur les Électre*, éd. David Jory, *OC*, t. 31A, p. 585. ジャン=ジャック・ルソーもギリシア人と演劇との関係について指摘している。「古代ギリシア人たちは、彼らの悲劇の主要な関心を恋愛に基づいて築く必要はなかった。また実際その主題を悲劇の中に組み入れなかった。同じ方策を持していない我々の悲劇は、この関心事なしには済まされないのである。」Jean-Jacques Rousseau, « Note » de la *Lettre à d'Alembert sur les spectacles*, dans *Œuvres complètes*, t. V, « Écrits sur la musique, la langue et le théâtre », éd. Bernard Gagnebin et Jean Rousset, Gallimard, coll. « Bibliothèque de La Pléiade », 1995, p. 26.

私はそれをしなければならない…でもどういう訳で私はそれができないというの？

ああ！ もしそれが私の腕を引き留める愛であるとしたのなら<sup>39)</sup>！

エレクトラはアイギストスだけでなく彼女が秘かに思いを寄せている彼の息子イティスも、アガメムノンのために殺害せねばならない。そういう訳で彼女は復讐をする決心がつかないでいたのであった。エレクトラの弱さは作品の最初から現れ、彼女の中には本来の頑なな心はもはや見られない。そしてティデという名の青年がオレステスであると判明した時、彼の養育係のパラメードはエレクトラに対して、敵である父親と息子とを共に罰するために、イティスと婚礼を挙げるふりをして彼らをおびき出すように要求する<sup>40)</sup>。しかしながら、自分の愛を復讐のために犠牲にするという義務の重みが、またもやエレクトラの心にのしかかり、彼女の口から思わず叫び声が漏れる。「彼を祭壇に連れて来るんですって？ ああ、私を打ちのめす企て！／イティスはそこで命を落としてしまうでしょう。イティスには罪はないのに<sup>41)</sup>。」エレクトラはアガメムノンの名誉よりも、自分の愛する者を救うことに心を砕いているのである。

さらにヴォルテールは再び紀元前5世紀のギリシア人の感受性に触れながら、今回はエレクトラだけでなく彼女の弟であるオレステスをも批判する。

---

39) Prosper Jolyot de Crébillon, *Électre* [1708], dans *Théâtre complet*, t. I, éd. Magali Soulatges, Classiques Garnier, 2012, I, 1, v. 36-40 [Électre]. 一方、エレクトラと同様恋に悩むイティスが彼女に会った時、彼も次のように嘆いている。「苦しみによって導かれた恋する男をあなたに差し出そうとする／罪のない過ちをどうか許して下さい。／不幸な愛の悲しき不安が／私に夜の孤独を探し求めさせたのです。／もし愛が私の足をあなたの方に向けさせたとしても、お許し下さい。」*Ibid.*, I, 3, v. 95-99 [Itys].

40) *Ibid.*, IV, 3, v. 1289-1294 [Palamède].

41) *Ibid.*, IV, 3, v. 1297-1298 [Électre].

彼女の父親の殺人者であり、彼女の母親の誘惑者でもあり、オレステスの迫害者で、彼女のあらゆる不幸の張本人である、アイギストスの息子に恋をしているエレクトラと、彼の一家全体の死刑執行人であり、彼の王冠の強奪者であり、厚かましくも彼の命を奪うことしか頭がない、この同じアイギストスの娘に恋をしているオレステスは、アテネの劇場ではどちらとも失敗したことでしょう。この二重の愛は当然ながら最も成功しなかったでしょう<sup>42)</sup>。

自分たちを不幸に陥れた下手人の非道さをさまざまな形容を用いて強調することで、そのような父親を持った本来憎むべき子供たちを犠牲者たちが愛することができるとは到底不可能である、とヴォルテールは力説する。したがってクレビヨンが挿入した2つの恋愛は、オリジナルの『エレクトラ』の主題とは最も相容れないものだと彼は咎めているのである。

それでは、ここまでクレビヨンのエレクトラを見たが、ヴォルテールが彼女と共に批判しているオレステスにも目を向けてみよう。クレビヨンのオレステスとギリシアの悲劇作家のそれとの大きな違いは、先ずティデという名で育てられたオレステスが、養育係であるパラメードの実の子でオレステスの友人であると信じている、ということである。当然本人は自分がアガメムノンの息子であるという事実を知らない。次にオレステスはアイギストスを倒すために彼に仕える戦士を装っているのだが、この暴君の娘イピアナッサを愛しており彼女もまた彼を愛している、というオリジナルとの違いが見られる。したがってオレステスも姉と同様、恋人の父親を罰さなければならないという義務に苛まれ、彼はアイギストスの殺害ではなく、その命を救うための追放を望む<sup>43)</sup>。そして悩んでいるオレステスの悲しみと絶望を目にした、彼の腹心のアンテノールにその理由を尋ねられ、オレステスは次のように返答している。「私の恋

42) *Dissertation sur les Électre*, OC, t. 31A, p. 588.

43) Prosper Jolyot de Crébillon, *Électre*, op. cit., II, I, v. 465-473 [Oreste-Tydée].



の炎を気の毒に思っておくれ。／私の運命に同情しておくれ。いや、これ以上に憐れむべき者は決していなかった。／私にはさらに恐るべき不幸がまだ残されているのだ<sup>44)</sup>。』自分がアガメムノンの息子であるという事実を知らない以上、オレステスがアイギストスに対する復讐には消極的で、同時にその娘を愛するというに無理はないのだが、ヴォルテールの目には仇を討つ英雄としてはあまりにも弱い存在に映ったのであろう。次の場面ではイピアナッサにテレフォンという名の王との縁談が持ち込まれ、そのことを知ったオレステスは、恨みがましく彼女に結婚するように促す<sup>45)</sup>。しかし勧めながら激しい嫉妬に襲われたオレステスは、自分の思いをイピアナッサに打ち明け、かえってその大胆な行為を彼女に非難される。その結果絶望した彼はミュケナイから立ち去る決心までしてしまうのである<sup>46)</sup>。さらにティデという若者がオレステスであるということはまだ知らないエレクトラが彼に会った時、彼がアイギストスに仕えていることを不満に思っていた彼女は、もしあなたがオレステスの友人のティデであるのなら、イピアナッサの父親を討たなければならないと彼を咎める。この非難に対しオレステスは歎願しながら答えている。

少なくとも私の申し訳ないという気持ちに温情をかけて下さい。  
 なるほど私は罪深き炎に焼き尽くされています。  
 それに私の義務ほど神聖な義務はありません。  
 ですが愛は愛の権利以外の別の権利を知っているのでしょうか？  
 私を焼き尽くしている恋情をどうか責めないで下さい<sup>47)</sup>。

アガメムノンの遺児たちのために復讐をせねばならないこと、またアイ

44) *Ibid.*, II, 1, v. 445-446 [Anténor] et v. 492-494 [Oreste-Tydée].

45) *Ibid.*, II, 2, v. 557-562 [Oreste-Tydée].

46) *Ibid.*, II, 2, v. 571-586 [Oreste-Tydée] et v. 587-594 [Iphianasse] ; II, 3, v. 595-608 [Oreste-Tydée].

47) *Ibid.*, III, 2, v. 812-816 [Électre] et v. 817-821 [Oreste-Tydée].

ギストスの娘への愛は裏切りであるということをオレステスは充分意識していながらも、彼は愛の熱情には抵抗できないでいる。したがって、彼はエレクトラにまたしても懇願する。「あなたの憎しみをイピアナッサから取り除いて下されば、/ 私の果敢さがあなたのためにしないものは何もあります<sup>48)</sup>。」エレクトラがイピアナッサを好意的に思ってくれるのであれば、オレステスにとって自分の熱情とアガメムノンの復讐を阻むものはもはや何もない。そして、パラメードが実の父親で亡くなったと思いついでいたオレステスが彼に再会した時、養父もクリュタイムネストラの息子に対し彼女の夫と親しい関係にあることを咎める。だがこの時もアガメムノンの息子は、エレクトラにしたようにパラメードに憐れみを乞う。

    恥辱があなたの目の前で私を罰しているだけで充分なのです。  
 これ以上の残酷な刑を私に望まないで下さい。  
 不幸な愛に憐れみをかけて下さい。  
 これほどまでの厳格さで私を罰している神は、  
 私の魂が苛まれているこの痛ましい苦しみを知っておられるのです<sup>49)</sup>。

オレステスはパラメードにもうこれ以上自分の愛を責めないで欲しいと切願する。なぜなら神の罰だけでもう充分なのだから。最後にオレステスはアイギストスを倒すという復讐を忘れてしまうほどまでに、イピアナッサへの激しい愛に駆られてしまう。

    アガメムノンの血が私にはどれほど重要だということでしょうか？  
 私の魂の激情と私の恋の炎に与えられる輝かしい報酬を  
 彼のために犠牲にするほど、この偉大な名に私を

48) *Ibid.*, III, 2, v. 865-866 [Oreste-Tydée].

49) *Ibid.*, III, 5, 1011-1017 [Palamède] et v. 1021-1025 [Oreste-Tydée].

結び付けようとするに、どれほどの神聖なる意味があるのでしょうか？

それにどうしてあなたの息子は彼のために犠牲を払わねばならないのでしょうか<sup>50)</sup>…

その結果もはやオレステスの返答に耐えられなくなったパラメードは、ティデオそが実はオレステス自身なのだ、と彼に教えることとなる。そしてこの事実を知った後は、アガメムノンの息子も自分の愛を恥じ入り、すぐに実の父親のために復讐を誓うのであった<sup>51)</sup>。

以上がヴォルテールの『エレクトラ』批判と作品の内容である。確かに彼の指摘通り、恋するエレクトラとオレステスの姿が際立っている。しかし憎むべき家族同士の子供らが愛し合う作品はクレビヨンには他にもある。それは1707年初演の『アトレウスとテュエステス』で、ヴォルテールも1771年に『ペロプスの子孫たち』という題名で、上演は果たされなかったものの書いている。この悲劇については簡単に見てみる。彼はこの悲劇を「反クレビヨンの5幕」と名づけ、またある青年が作ったという設定のもと作者を「反クレビヨンの若者」と呼んでいる<sup>52)</sup>。というのも10年前に彼はすでにライバルのこの悲劇に対し不満があったからである。ヴォルテールはこう咎めていた。「著者はまたもや現代人からひどく咎められるような過ちに陥っています。つまり、無味乾燥な恋愛という過失なのです<sup>53)</sup>。」同じ様に彼が『ペロプスの子孫たち』を創作した時にも繰り返す。「3つ目の誤りは、意味のない恋愛です。それは冷え冷えとしているように思われ、演劇の空隙を埋めることにしか役立っていない

50) *Ibid.*, III, 5, v. 1047-1051 [Oreste-Tydée].

51) *Ibid.*, III, 5, v. 1060-1061 [Palamède] et v. 1089-1098 [Oreste-Tydée].

52) *Lettres à la comtesse d'Argental*, 3 janvier et 9 mars 1771, *GC*, t. X, p. 567 et 653.

53) *Éloge de Monsieur de Crébillon* [1762], « *Atrée* », éd. Jeroom Verduyssen, *OC*, t. 56A [2001], p. 299.

い、という噂です<sup>54</sup>。」ヴォルテールにとってはクレビヨンが挿入した色恋話は常に価値のない余計なものでしかない。確かに彼の悲劇では『エレクトラ』と同様、敵同士である兄アトレウスの息子プレステネスと、弟テュエステスの娘テオダミーの間で恋愛が繰り広げられる<sup>55</sup>。しかもこの戯曲では、アトレウスの息子として育ったプレステネス [ギリシア神話ではアトレウスとテュエステスの兄弟] は、実はテュエステスの息子なのである（もちろんアトレウスが復讐のために最初から仕組んだことなのだが<sup>56</sup>）。したがって、プレステネスとテオダミーとの間で近親相姦の危険を孕むこととなる。このような展開が生じるのはやはりクレビヨンが、本来は兄弟の間でアエロペを争う主題に、別の恋愛話を導入したことによる。それがヴォルテールには受け入れ難いことであった。それでは次に1717年初演のクレビヨンの『セミラミス』を扱う。

## 2. 母親の狂気的な愛

ヴォルテールも1748年にこの悲劇を創作し、両作品とも夫であるバビロニア王ニニウスを殺害したセミラミスが、1人の青年を息子とは知らず愛してしまう。しかし、ヴォルテールでは亡霊となった王が息子ニニウスに母親を罰するよう命じ、彼女は錯乱した息子によって殺されるのに対し、クレビヨンでは窮地に追い込まれた末王妃は自害する。さらにクレビヨンの『セミラミス』の最大の特徴は、アジェノールという名で育てられたニニウスが自分の息子であると知った後の彼に対するセミラミスの態度である。ヴォルテールはこう批判している。「この悲劇で最も許し難い欠点は、ニニウスが自分の息子と分かった後でも、セミラミス

54) *Les Pélopidés, ou Atrée et Thyeste*, « Fragment d'une lettre » [1772], éd. Michael Hawcroft et Christopher Todd, *OC*, t. 72 [2011], p. 38.

55) Prosper Jolyot de Crébillon, *Atrée et Thyeste* [1707], dans *Théâtre complet*, t. I, *op. cit.*, I, 5 : IV, 2.

56) *Ibid.*, IV, 3.

がまだ彼を愛しているということです<sup>57)</sup>。」彼の目にはニニアスへのセミラミスの愛が狂氣的なものにしか映らなかったのである。確かにこの王妃は、息子と判明した直後に彼に言っている。「いいや、お前は私の息子ではない。そのような欺瞞で／私の猛烈な愛を否定しようとしても無駄なことだ<sup>58)</sup>。」セミラミスにはニニアスが自分の愛を拒否するために嘘をついているのだとしか思われぬ。だからこそ彼女はそんな彼の冷淡な態度を激しく罵る。

恩知らずよ、私はお前をまだあまりにも激しく愛している。  
 したがって私の心の激情をお前のために犠牲にすることはできぬ。  
 だが侮辱を受けた愛する女には気をつけるがよい。  
 お前を破滅に向かわせようとする母親に気をつけるがよい<sup>59)</sup>。

このアジェノールと名乗る青年が息子であろうとなかろうと、自分を愛してくれることがセミラミスにとっては最優先なのだ。というのも、この若者に対して今までずっと抱き続けてきた情念を、彼女はもはや消すことができなくなってしまっているからである。セミラミスにおいては母と子という関係は決して情念を弱める要素とはならない。彼女は腹心のフェニスに打ち明けている。

愛が魅惑したこの不幸な心は  
 今までに息子として愛することを教えられたというのか？  
 神の怒りが私の魂に募らせる  
 炎を消すには一瞬で充分であるというのか？

---

57) *Éloge de Monsieur de Crébillon*, « *Sémiramis* », OC, t. 56A, p. 317.

58) Prosper Jolyot de Crébillon, *Sémiramis* [1717], dans *Théâtre complet*, éd. Auguste Vitu, Garnier-Frères, 1923, IV, 5, v. 1419-1420 [Sémiramis].

59) *Ibid.*, IV, 5, v. 1443-1446 [Sémiramis].

愛をこれほどまでに感じる心においては、  
それに打ち勝つ努力は1日で成し遂げられる業だとお前は思っている  
のか<sup>60)</sup>？

たとえニアスが自分の息子であるということが事実だとしても、セミ  
ラミスは女として愛した感情をすぐに息子に対する母性愛に変えること  
はできないのである。彼女の激しい執着心を目の当たりにしたフェニス  
は、もはやセミラミスの言動に耐えられなくなり、ニアスの恋人であ  
るテネジスの名を挙げながら、王妃にこう言わずにはいられない。

とはいえ、いかなる不吉な希望がなおもあなた様を喜ばすのでしょ  
うか？

結局は彼が熱愛している女性はテネジスでありますのに。

もうだいぶ前から、宮廷全体は彼の愛の噂で

もちきりですのに、あなた様だけがそれを知らないのです<sup>61)</sup>。

60) *Ibid.*, IV, 6, v. 1505-1510 [Sémiramis].

61) *Ibid.*, IV, 6, v. 1527-1530 [Phénice]. クレピヨンは側近らが自分の主人の情念をなだめる場面をいくつか書いている。『イドメウス』では、海神ネプトゥヌスとの誓約を守らなかったため自分が招いた惨事で国が危機の状態であるにもかかわらず、愛に激しく苦しめられエリグゼースのこゝしに頭がないクレタ王イドメウスに対して、大臣のソフロニームはこの愛を鎮めようと努めている。また『ラダミストゥスとゼノビア』は、夫王が死んだものと信じていたゼノビアが、ラダミストゥスの弟であるアルサームに思いを寄せていたため、腹心のフェニスに義弟へのこの不実な愛を非難させている。さらに『三頭政治』においては、アントニウスの部下であるレナがキケロを殺害した後、この雄弁家の娘テュリーを愛するオクタヴィアヌスは、彼女を慰めようと彼女のもとに駆けつけようとするが、彼の腹心のメセースは彼女への愛を諦めるようにと助言している。Prosper Jolyot de Crébillon, *Idoménée*, dans *Théâtre complet*, t. I, *op. cit.*, I, 2, v. 209-210 ; II, 3, v. 495-496 et 507-536 ; III, 7, v. 971-973 [Sophronyme] ; *Rhadamisthe et Zénobie*, dans *Théâtre complet*, t. I, *op. cit.*, I, 1, v. 155-158 [Phénice] ; *Le Triumvirat ou La Mort*

フェニスは何とかセミラミスに、ニニラスとテネジスは相思相愛であるため、もはや王妃には愛される希望が残されていない以上、彼への愛は諦めるしかないということを理解してもらおうと説得する。しかし腹心の口から洩れたテネジスという名が、かえってセミラミスの情念をより一層燃え立たせてしまったのである。そこで王妃はさらに激しい嫉妬に駆られ実の息子の恋人テネジスを誘拐までしてしまう。しかしながら王妃の軍隊は彼女を裏切り、彼女の弟であるペリュスは国賊として姉を罰することを命じる<sup>62)</sup>。これを聞きつけたニニラスは母親を救いに行くが、彼女は息子が恋人を救いに来たと思ひ込み憎しみを露わにする。

お前の魂が苛まれている悲痛な激情を、  
 私が過度の喜びも感じずに、見ることができるかどうか判断するがよい。  
 お前の嘆かわしい愛がこの不幸な女を  
 どんな状態に陥らせるかを見るがよい<sup>63)</sup>。

セミラミスは恋人を奪われた息子の悲痛を楽しんでいる。おまけに恋敵のテネジスは彼女の姪でもあるのだ。その上ニニラスが母親の脅しに対し、自分が犠牲になる代わりに恋人だけは無事に返してほしいと懇願したことが、彼女の嫉妬を一段と掻き立て彼女の敵意は倍増してしまう。「ぐずぐずせずにお前の欲望を満足させてやろう。／お前にテネジスを返してやろう。だが命はないであろう彼女を<sup>64)</sup>。」このように吐き捨てた後、彼女は自刃するが、死の間際でさえもニニラスへの彼女の恨みは消えることはない。彼女は実の息子にこう叫んでいる。「何と残酷なことよ！唯一の後悔が私の苦痛を増大させている。／それは私の憤激の思うままに、

---

*de Cicéron, dans Théâtre complet, op. cit., V, 2, v. 1621-1624 [Mécène].*

62) Prosper Jolyot de Crébillon, *Sémiramis, op. cit., IV, 6, v. 1555-1558 [Sémiramis] et V, 2, v. 1591-1598 [Phénice].*

63) *Ibid., V, 3, v. 1631-1634 [Sémiramis].*

64) *Ibid., V, 3, v. 1655-1659 [Ninias] et v. 1667-1668 [Sémiramis].*

お前の目の前で／お前の熱情の対象を犠牲にできないということだ<sup>65)</sup>。] セミラミスはニニアスを決して息子とは認めず、狂気的な愛に駆られたまま息を引き取るのである。一方息子もこの信じがたい母親の姿を見て嘆かずにはいられない。

おお天よ！母親の心の中でこれほどの罪深い炎が  
包み隠さず燃え上がるのを誰が今までに目にしたのでしょうか？  
それを予見していた神々は、彼女の胎内で、己の血を受け継ぐこととなる  
私を宿らせることを、ニニユスに許すべきだったのでしょうか<sup>66)</sup>？

ニニアスはこの世に命を授けられたことを恨めしく思う。またセミラミスの方も彼女の愛は報われることなく自害する。クレピヨンの『セミラミス』では、ヴォルテールが非難していたように実の息子に対する母親の狂気的な愛が前面に押し出されているのである<sup>67)</sup>。それでは最後にキケ

65) *Ibid.*, V, 3, v. 1684-1686 [Sémiramis].

66) *Ibid.*, V, 3, v. 1687-1690 [Ninias]

67) 同じ王妃を扱った戯曲に目を向けてみると、ガブリエル・ジルベールの1647年初演の『セミラミス』では、夫のニニユスに対する王妃の復讐が主題となっている (Gabriel Gilbert, *Sémiramis*, chez Augustin Courbé, 1647)。またゴメス夫人の1724年初演の『セミラミス』は、王妃がニニユスと結婚するまでの過程を扱っており、最後は目的を果たして王と結ばれる (Mme de Gomez, *Sémiramis*, dans *Œuvres mêlées de Madame de Gomez*, chez Guillaume Saugrain, 1724)。これらのニニアスを産む以前のセミラミスを主題とした悲劇とは反対に、デフォンテーヌの1647年初演の『真実のセミラミス』は、かなりクレピヨンと近い展開になっているので内容を簡単に確認したい。なおテキストは、Desfontaines (Nicolas Mary, dit), *La Véritable Sémiramis*, chez Pierre Lamy, 1647 を使用する。アッシリア王ニニユスの妻であるセミラミスは、この国の大将であるメリストラットという青年を激しく愛している。彼は王と王妃の息子ニニアスである。だが彼にはブラジメヌという相思相愛の恋人がいた。それを知ったセミラミスは彼らの仲を引き裂こうと企てる (I, 1)。同時に王妃はメリストラットと結婚するために、ニニユスを殺害



口を描いたクレビヨンの悲劇を中心に、それに対するヴォルテールの批判に目を向けたい。

### 3. 娘の結婚を望む父親

クレビヨンの『カティリーナ』は上述したように1731年にはすでに着手されていたものの、やがて彼は執筆を諦め17年という長い時を経て、ポンパドゥール夫人に励まされながら、ようやく上演まで漕ぎつけたのは1748年12月下旬のことであった。だがその3ヶ月後、ヴォルテールはラテン語でしたためた手紙で、1704年から1711年の間在学したルイ・ル・グラン校の当時の生徒監であるドリヴェ師に言っている。「私は蛮人クレビヨンの罪を贖うために、再読したあなたの『キケロ』をお送りします<sup>68)</sup>。」ヴォルテールは1744年に師によって書かれた『キケロの思想』を読み返し、ライバルの『カティリーナ』に対し再び狼煙を上げることがを

---

する計画まで立て (I, 2 et 4 ; II, 2)、王殺しを腹心のメルザバースに頼み (II, 3)、彼女はひたすらこの2つの計画だけに心を奪われる (III, 2)。そして王位転覆を狙っていたメルザバースは (III, 3-4)、ニニウスを殺害する (IV, 4)。これでセミラミスはメリストラットと無事に結婚できると思ったが、彼はブラジメースを心から愛しており、彼女のために王妃との結婚を断固として断ったことを口伝で聞く (IV, 1 et 3)。そこで今度は嫉妬に狂ったセミラミスはメリストラットを殺害することを決める (IV, 5-6)。しかしながら、彼女は彼が自分の息子だと知り (V, 2)、彼の父親であるニニウスを殺したことを悔やんだ後、セミラミスは自刀するのである (V, 3)。

68) Lettre à Pierre-Joseph Thoulier d'Olivet, vers le 5 mars 1749, *GC*, t. III, p. 28. ヴォルテールはよくクレビヨンを「蛮人」と呼んでいる。Lettre à Claude-Henri de Fuzée de Voisenon, 4 septembre 1749, *GC*, t. III, p. 104 ; Lettre à Adrien-Michel-Hyacinthe Blin de Sainmore, 7 septembre 1764, *GC*, t. VII, p. 835 ; Lettre à Étienne-Noël Damilaville, 4 septembre 1767, *GC*, t. IX, p. 85 ; Lettre au comte d'Argental, 6 février : Lettre au marquis de Thibouville, 6 février : Lettre à Jean-François de La Harpe, 25 février : Lettre au marquis de Thibouville, 15 novembre 1771, *GC*, t. X, p. 609, 612, 636 et 870 ; Lettre au duc de Richelieu, 4 juin 1773, *GC*, t. XI [1987], p. 373.

決意する。1週間後にはダルジャンタル侯爵に語気鋭く言い放つ。「読んで下さい、私があなたに送付するものだけを読んで下さい。今月の3日、憚りながらも、悪魔が私に取り憑き私にこう言いました。『キケロとフランスの復讐をするがよい。お前の国の恥辱を雪ぐがよい』と<sup>69)</sup>。」彼の目にはクレビヨンの作品は自国に対する恥辱であり、ヴォルテールは自作の『救われたローマ』によって雪辱を遂げようと試みたのだ。彼は2日後にも2通の手紙を同時に送り、一方ではメヌ侯爵夫人に彼女も復讐を望んでいるだろうと期待を寄せ、他方ではパリ高等法院長エノーに彼の悲劇を読んでキケロの復讐ができたかどうか判断を求めている<sup>70)</sup>。また同月末には「キケロへの復讐が成功するのでしたら、よし！ ソフォクレスの仇も討つことができるでしょう<sup>71)</sup>」と、ヴォルテールは友人夫妻に『オレステス』もほのめかしながら期待に胸を膨らませる。別の文通相手にも彼の決意がはっきりと示されていた。「私は帰る道すがら、メヌ侯爵夫人に『カティリーナ』[『救われたローマ』]だけでなく、『エレクトラ』[『オレステス』]もお見せすることができます。私は彼女の庇護のもとにキケロとソフォクレスのための復讐を望んでいるのです<sup>72)</sup>。」さらに同日の書簡では自らを「クレビヨン家の鋳型の修理屋」と命名しながら、「私の使命が、1人の蛮人の蹂躪に対して、キケロ、ソフォクレス、ローマ、ギリシアの恨みを晴らすことを私に要請しているのです<sup>73)</sup>」と自分を鼓舞している。そしてここまでヴォルテールがしつこく宣戦布告する理由を、クレビヨンの『カティリーナ』を採り上げながら彼は述べている。「とりわけキケロが卑しくされた扱いに私は憤慨しております。自分の娘にカティリーナに言い寄ることを勧めているこの偉大な人

69) Lettre au comte d'Argental, 12 août 1749, *GC*, t. III, p. 74.

70) Lettre à la duchesse du Maine, 14 août : Lettre à Charles-François Hénault, 14 août 1749, *GC*, t. III, p. 78 et 80.

71) Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 28 août 1749, *GC*, t. III, p. 93.

72) Lettre à la baronne de Staal, 4 septembre 1749, *GC*, t. III, p. 103.

73) Lettre à Claude-Henri de Fuzée de Voisenon, 4 septembre 1749, *GC*, t. III, p. 104.

物は、劇の始めから終わりまで、滑稽さで覆われていました<sup>74)</sup>。」ヴォルテールにはこの尊敬に値するローマの雄弁家が、敵である相手に対し娘テュリーに媚びを売ることを望むような人物に仕立て上げられたことが許せなかったのである。彼が批判しているように、キケロは絶えずカティリーナの権力を恐れ、自分の娘を利用して陰謀家に取り入ろうと試みている。雄弁家はこう自分に言い聞かす。「カティリーナの心にテュリーの力を用いよう、／私の力がこれほどまでに辱められなければならない以上は、／お前には何という破滅が、不幸なキケロよ<sup>75)</sup>！」このような手段で自己防衛をするキケロの姿はこの偉人に対する侮辱以外の何物でもない、ヴォルテールは憤りを隠せなかった。だがテュリーとカティリーナはもともと互いに心を寄せ合う仲であった。そして謀反人はそれでもキケロ殺害の陰謀を企てるが、幸い失敗に終わったためキケロは救われる。そこでカティリーナは自害することを心に決め、自分の決意をテュリーに伝えようと彼女のもとへ駆けつける。しかし彼女は自分の父親を殺害しようとした者であるにもかかわらず、カティリーナへの愛のために命を落とさないようにと懇願するのであった<sup>76)</sup>。ヴォルテールはテュリーに対しても、「厚かましい考え、恋愛における嫉妬、キケロの娘に恋をさせるというおめでたい発想については、自分の同業者に私は任せさせていただきます<sup>77)</sup>」と批判していた。

またクレビヨンには『カティリーナ』と同じように、キケロが娘に結婚することを勧める姿が描かれている悲劇がもう1つある。それは1754年に上演されたライバルの『三頭政治』で、ちょうど10年後にヴォルテールは「私はクレビヨンの古い悲劇をいつも繕っている靴直し職人と呼

74) *Éloge de Monsieur de Crébillon*, « *Catiline* », OC, t. 56A, p. 319.

75) Prosper Jolyot de Crébillon, *Catiline* [1748], dans *Théâtre complet*, op. cit., II, 4, v. 793-795 [Cicéro].

76) *Ibid.*, V, 6, v. 1731-1732, 1774-1775 [Catiline] et v. 1803-1824, 1854-1864 [Tullie].

77) Lettre à Anne-Marie Fiquet du Bocage, 21 août 1749, GC, t. III, p. 88.

ばれることでしょう<sup>78)</sup>」と、自分を茶化しながら同じ題名の芝居を書くこととなる。彼のライバルの戯曲では、アントニウスと彼の妻のフルウィアが、キケロを抹殺しようと企んでいる。反対にキケロに対し親愛感を抱いていたオクタヴィアヌスには、すでにスクリボニアという妻がいたが、雄弁家の娘テュリーを熱愛していたため彼女に直接結婚を申し込む。だが執政官の思いは知っていたものの、彼の人間性を疑問視していたキケロは普段から彼を否定していた<sup>79)</sup>。そこでこの雄弁家は『カティリーナ』の時の彼のように政敵から身を守るため、今回はポンペイウスの息子でクロドミールという偽名を用いていたセクストゥスと、娘テュリーとを結婚させようと努め思いを巡らす。

[...] セクストゥスは

テュリーの心の全てを知っている訳ではない。

いや、彼女に私の愛情が嫌々ながら隠していた

秘密をもはや打ち明けないままでは済まされまい。

偉大なるポンペイウスの息子となったクロドミールは、

私が彼女の目を覚ませたことを咎めることはできないだろう。

彼らを結ばせよう。皇帝継承者にライバルを与えよう。

彼の名だけでもオクタヴィアヌスには重大事となるであろう<sup>80)</sup>。

78) Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 27 septembre 1763, *GC*, t. VII, p. 382. 上演当時ヴォルテールは次のように言っていた。「愉快な噂が流されていました。私が『三頭政治』も創作したということでした。私は劇場においてこのような内戦を引き起こそうなどという気は毛頭ありません、とあなたに断言いたします。」  
Lettre au marquis de Thibouville, 27 août 1754, *GC*, t. IV, p. 239.

79) Prosper Jolyot de Crébillon, *Le Triumvirat ou La Mort de Cicéron*, *op. cit.*, I, 2 et 4, v. 89 [Clodomir] et v. 224-227 [Lépide] ; I, 2 et 4, v. 101-106 [Clodomir] et v. 235 [Lépide] ; II, 4, v. 569 [Tullie] et v. 555-560, 634-642 [Octave] ; II, 2 et IV, 4, v. 429-434 et v. 1264-1272 [Cicéron].

80) *Ibid.*, I, 5, v. 345-352 [Cicéron].

テュリーの結婚相手はいつも彼女の父親の政治的利害に依存している。もちろん政略的結婚はどの時代にも権力争いには切り離せないものだが、この戯曲でも娘の結婚に心を砕いているキケロの姿が目立っている。そしてクロドミールが実はセクストゥスであるという事実を父親から知られた彼女は、キケロの意図をポンペイウスの息子に直接伝えに行く。

私の父親は死ぬ前に、私たちの結婚が、  
この恐ろしい日に婚礼の火で照らされることを望んでおります。  
ああ！ 彼のように最も恐ろしい運命に脅かされている  
不幸な者同士を結び付けることが、彼には何の役に立つというのでし  
ょうか？  
たった一瞬の間しか夫となり得ない者を  
私に承認するために彼は何という時を選んだのでしょうか<sup>81)</sup>？

キケロがテュリーとセクストゥスとが結ばれることを望んでいる一方で、娘は現状に思いを馳せ東の間の夫婦でしかいられない儚い結婚生活を嘆く。だが今度はキケロ本人が2人に自分の願いを打ち明ける。「私は死ぬ前に、私の手でお前たちを結びつきたい。／私はセクストゥスにこの優しき捧げ者を約束したのだ<sup>82)</sup>。」最終的にキケロは以前自分が命を救った刺客の手にかかって殺害されることとなる。そして父の死を知ったテュリーも自害してしまう<sup>83)</sup>。この『三頭政治』に見られるキケロは『カティリーナ』と比較すれば、保身というよりもローマの永続を思いオクタヴィアヌスが独裁者とならぬために娘の結婚を考えていた、と言えよう。

さて『カティリーナ』と『三頭政治』には、テュリーを結婚させよう

81) *Ibid.*, II, 6, v. 681-686 [Tullie].

82) *Ibid.*, III, 1, v. 737-738 [Cicéron]. 一方オクタヴィアヌスの方は、雄弁家の命をアントニウスの手から救うため、自分とテュリーとの結婚を認めるよう直接キケロに申し出ている。*Ibid.*, IV, 4, v. 1256-1257 [Octave].

83) *Ibid.*, V, 2 et 3, v. 1558-1568 [Mécène] et v. 1722-1726 [Tullie].

と努めるキケロの姿が確認できた。さらにクレビヨンにはこの雄弁家は登場しないものの、娘の結婚を望む父親を登場させている作品として『クセルクセス』という悲劇がある。しかしながら、この戯曲で描かれている大臣兼親衛隊長のアルタバンは、キケロとは違って、娘のバルシーヌに対し僅かな愛情すら感じる事のない無慈悲な父親である。ペルシア王クセルクセスの長男ダレイオスに自分の娘を与えるために、アルタバンは腹心のティサフェルヌにこう命じている。

彼 [=ダレイオス] に私からだと言って財宝、武器、軍人を贈れ。  
とりわけ彼には娘の魅力を褒めそやせ。  
私の尊敬は喜んで彼にアルタバンの腕と  
バルシーヌの手を与えるつもりだと伝えよ<sup>84)</sup>。

父親は娘を王子に与えるために彼女の魅力を武器に彼を魅惑させようと目論んでいる。さらに悪いことに、アルタバンはダレイオスが娘を愛していないのを知っているのである。

この王子は別のところで不実な炎に身を焦がしている。  
出征の前でさえ、王が色々と手を回しているにもかかわらず、  
彼のバルシーヌに対する軽蔑は私にまで及んだ。  
[…]  
いずれにしても、彼が王国に対し反乱を起こしさえすれば、  
彼の心が誰に恋い焦がれようと私にはどうでもよいことなのだ。  
私が自分の法に国家を従わせるには、  
彼を邪悪な陰謀へと向かわせることによってでしかないのだ<sup>85)</sup>。

84) Prosper Jolyot de Crébillon, *Xerxès* [1714], dans *Théâtre complet*, t. I, *op. cit.*, I, 1, v. 63-66 [Artaban].

85) *Ibid.*, I, 1, v. 70-80 [Artaban].

アルタブンはダレイオスの不貞をしっかりと認識している。したがって、いずれバルシーヌが王子と結婚したとしても、彼が原因で遅かれ早かれ娘は辛い思いをするであろうことも、予見することができる。だがこの父親にとって娘の悲嘆は重要ではない。彼は権力を手に入れるために、良心の呵責もなく娘を犠牲にすることができるのである。そしてアルタブンは直接クセルクセスに助言している。

さあでは！ 王よ、

ダレイオスは最初の情火に立ち返り、  
かつてないほど夢中になった彼は私の娘のもとに戻って来たと、でっ  
ち上げて下さい。

あなた様のどんな小さな意図にも私は自分の家族を差し出します。

王よ、それを自由に使って下さい。たとえそのためにバルシーヌがそ  
の時

妬み深い宮廷のなぶり者にされましようとも、

あなた様を恐怖で凍てつかせる不幸から守るためには、

身を落とすというようなことはなく、策略さえも認められるのです<sup>86)</sup>。

この父親にとって娘は権力獲得のための道具でしかない。そこには娘の幸せを願う気持ちは微塵も見られないのである。また『カティリーナ』、『三頭政治』、『クセルクセス』の他に『ピュロス』でも娘の縁談を持ちかける父親が描かれている。エピロスの篡奪者でエリシーの父親であるネオプトレモスは、支持を得るためにエピロス王ピュロスと結婚することを娘に勧め、同じように父王のグラウシアスは自分の首を要求する篡奪者の手から逃れるために、エリシーに自分の息子の妻になってくれるよう懇願している<sup>87)</sup>。

86) *Ibid.*, I, 2, v. 195-202 [Artaban].

87) Prosper Jolyot de Crébillon, *Pyrrhus* [1726], dans *Théâtre complet, op. cit.*, II, 1,

最後にクレビヨン悲劇の色恋話について付け加えておくと、『アトレウスとテュエステス』が本来は1人の女性を巡る兄弟間の争いが主題であったように、先ほど見た『クセルクセス』でも、王の2人の息子のダレイオスとアルタクセルクセスの間に恋愛における諍いが描かれている<sup>88)</sup>。これに関連し兄弟ではないが肉親同士で展開される女性の奪い合いを、クレビヨンは1705年の処女作『イドメネウス』の主題として選んでいる。この悲劇ではトロイアの木馬でも登場するクレタ王イドメネウスが、かつて自分が命を奪ったメリオンの娘エリグゼーヌを愛しており、その一方で王の息子イダマントも同じ女性に思いを寄せているという父と子の争いが描かれている<sup>89)</sup>。さらに1711年初演の『ラダミストゥスとゼノビア』はこれらの複合型で、アルメニア王ラダミストゥスの妻ゼノビアを巡っての、イベリア王で彼の父親のファラスメナスと、ラダミストゥスの弟アルサームの闘争が主題である<sup>90)</sup>。このようにクレビヨンの戯曲では常に恋愛の場面が展開されていたが、そもそもどうしてヴォルテールは悲劇におけるギャラントリーに異を唱えて続けていたのであろうか？それはやはりギリシア悲劇への彼の思いに深く関わっていると言える。しかしながら大事なことは、クレビヨンとの関係は悪化したとはいえ、だからといって急遽こじつけとしてヴォルテールがライバル批判のために悲劇論をこしらえたのではなく、2人が仲違いをする以前からすでに彼には

---

v. 451-468 et 514-520 [Néoptolème] ; IV, 5, v. 1465-1470 [Glaucias].

88) Prosper Jolyot de Crébillon, *Xerxès*, *op. cit.*, I, 2 et 6-8 ; II, 5 et 8 ; III, 2-7 ; IV, 7-8 ; V, 3-4 et 6-7. この作品と同じ題名の悲劇をイエズス会の学院長ヴィオネ師が書いた時、ヴォルテールは師に呼び掛けていた。「私が彼 [=クレビヨン] の『セミラミス』になした以上に、あなたは彼の『クセルクセス』により多くの損害を与えました。彼に対して共に闘いましょう。」Lettre à Georges Vionnet, 14 décembre 1749, *GC*, t. III, p. 143.

89) Prosper Jolyot de Crébillon, *Idoménée*, *op. cit.*, II, 2 ; I, 4 et III, 5-7 ; IV, 2 et V, 2-3.

90) Prosper Jolyot de Crébillon, *Rhadamisthe et Zénobie* *op. cit.*, I, 2-4, III, 2-3, IV, 4 et V, 5.



是とする持論が存在していた、ということである。したがって検察官としてのクレビヨンではなく、悲劇作家としてのクレビヨンに対してなされた彼の批判をより深く調べることで、ヴォルテールの真意を汲み取ることができると思われる。それでは次章では彼がライバルの悲劇を否定していたその真の意図を探りたい。

#### IV. ヴォルテールにおけるギリシア悲劇の重要性

##### 1. 筋の単一

クレビヨンの『エレクトラ』に挿入された色恋話に対しヴォルテールが批判していた原因として、先ず筋の単一の問題が挙げられる。彼は劇作家としてのライバルの資質について指摘している。「作者にこのような野卑な愛の惨めな方策にすがらせるのは、優れた古代の作品への浅はかな知識と、あるいはむしろこれほど気高く単一の主題において5幕を埋めることができない無力さなのです<sup>91)</sup>。」ヴォルテールはクレビヨンの恋愛の挿入を劇作家の乏しい才能の結果であると見なしているのである。もちろんこれは彼の一方的な見解であり、クレビヨンにも自分なりの考えがあった。『エレクトラ』の作者は序文でこう自分の見解を述べていた。

私には古代ギリシアの熱狂者に対して、彼らにとりましては先の係争 [=筋の複雑さに対する批判] よりも重大で、私に言わせれば大したことは思われぬような別の弁護すべき係争があります。それはエレクトラの愛に関するもので、ソフォクレスが彼女に与えないように充分注意を払っていた感情を、私が彼女に吹き込んだという私の不敵さについてです。この感情は彼の時代では慣例ではなかったという

91) *Éloge de M. de Crébillon, « Électre », OC, t. 56A, p. 302.* ヴォルテールは自作の『オレステス』を採り上げて満足そうに、「恋愛を入れずに5幕作れたことはそれだけでたいしたものです」と自画自賛している。Lettre au comte d'Argental, 1<sup>er</sup> avril 1761, GC, t. VI, p. 330.

ことは事実です。しかしもし彼が我々の時代に生きていたのなら、彼も私と同じようにしたであろうということも事実なのです<sup>92)</sup>。

ここでクレビヨン、彼がエレクトルの愛を挿入したのは18世紀という時代の慣習からであり、同じようにソフォクレスがこの復讐劇にギャラントリーを挿入しなかったのも、当時の慣例によるものであると自分を正当化する。つまりどちらの劇作家もその時代の風潮に従っただけなのである。さらにクレビヨンは続ける。

偏見が優位を占め、先入観が余りにも極端に走っていますので、古人の名前だけは知っていても、ソフォクレスがギリシア人なのかフランス人なのかさえも分からないような人たちが、大胆にも私に対して異を唱えているのです。私を与えたのはソフォクレスの悲劇でもエウリピデスの悲劇でもなく、私の悲劇なのです<sup>93)</sup>。

クレビヨンからすれば価値も分からずに盲目的に古典を崇拝している者たちの方が、よっぽど非難に値する。何よりギリシアの劇作家の作品に自分は追従したのではなく、自分自身の作品を書いたのだと彼は強く主張しているのである。このようにクレビヨンが割り切っている以上、ヴォルテールの批判は独断的なものであり、むしろ独創性を重要視するクレビヨンの方が正しいのではないかと思われても仕方がない。しかしそれでも彼はライバルのこうした態度を無知と傲慢の結果でしかないと非難する。というのもヴォルテールの攻撃は、ギリシア悲劇の持つ筋の単一を重要視する彼の態度に起因しているからである。彼はソフォクレスを引用しながら具体的に述べている。

92) Prosper Jolyot de Crébillon, *Électre*, « Préface », *op. cit.*, p. 266.

93) *Ibid.*, pp. 266-267.

『エレクトラ』は古代人の好みであったと告白しなければなりません。無情で不幸な筋はこの恐ろしい主題を歪めませんでした。戯曲は単一でありエピソードはありませんでした。[...] アテネの偉大な天才たちが残したこの貴重な単一性という功績は、いずれパリにも受け入れられることでしょう<sup>94)</sup>。

自分の目にはギリシア悲劇の優れた特徴と映る筋の単一が、ギャラントリーの挿入で汚されることなく、いつの日かフランスでも容認されるのを心から願っていたからこそ、ヴォルテールはこの主題の不必要性を訴えていたのであった。1761年にも彼は自分の作品を採り上げて述べている。「私はいつも『オレステス』に関心を寄せております。コルデュロンの軍人たち [=クレピヨンの支持派] の陰謀に対し、ソフォクレスの単一を打ち勝たせることは、私の天使たち [=ダルジャンタル侯爵夫妻] にも相応しい行動と言えることでしょう<sup>95)</sup>。」ここでもソフォクレス、つまりギリシア悲劇と単一性との密接な関係が強調され、それは裏を返せばクレピヨンの悲劇への当て擦りでもある。しかしながらこうしたライバルへの批判は彼の確執とは関係なく、ヴォルテール自身がデビュー当時からすでにしていたことであった。1718年上演の処女作『オイディプス』を振り返りながら翌1719年に言っている。「女優たちは、もし戯曲に恋愛がないのなら自分たちは演じないだろうと申しました。少なくとも私はこの演劇に愛の思い出を挿入したのです<sup>96)</sup>。」ヴォルテールは女優

94) *Oreste*, « Épitre à la duchesse du Maine », *OC*, t. 31A, pp. 407-408.

95) *Lettre au comte d'Argental*, 11 avril 1761, *GC*, t. VI, p. 343.

96) *Lettres sur Œdipe*, « 5<sup>e</sup> lettre », éd. David Jory, *OC*, t. 1 A [2001], p. 368 [var.].  
したがって本当はヴォルテールもクレピヨンの気持ちをちゃんと汲み取っていた。「もし『エレクトラ』の著者もこうした子供じみた筋や主題には関係のない筋で、全てを歪めさせてしまうこととなるこの下らない慣習に強いられることがなかったのなら、彼は決して古代の最も崇高で最も恐ろしい主題の中に、2つの恋愛を挿入しなかったと私は確信しております。」*Lettre à Pierre-Joseph Thoulier*

たちの強要によって、オイディプスの妻であり母親でもあるイオカステと、ヘラクレスの親友ピロクテテスの恋愛話を取り入れることになったのである。つまりヴォルテールはもともと悲劇におけるギャラントリーの導入には反対していたのであった。その理由を彼はイオカステを追ってテーバイへとやって来たピロクテテスに言及して述べている。

彼は1幕に到着し、3幕に立ち去ってしまいます。[...] 彼は筋の結び目にほとんど貢献していません。そして問題解決は彼がいなくとも完全になされてしまいました。したがって、これは2つの悲劇作品に思えてしまいます。その1つはピロクテテスで展開し、もう1つはオイディプスで展開しているのです<sup>97)</sup>。

もちろんヴォルテール自身の力量も大いに関係があったと思われるが、彼は無理に挿入した恋愛話のお陰で、筋が二分されたことに不満を持っていたのだ。次に彼はコルネイユの同名の悲劇にも触れている。この17世紀の詩人も自作にオイディプスの妹であるディルセと英雄テセウスの恋愛を挿入した。18世紀の詩人は次のように評している。「テセウスの情念が悲劇全体の主題となり、一方オイディプスの不幸はエピソードでしかないのです<sup>98)</sup>。」ここでヴォルテールは主題の逆転について指摘している。彼が常々ギャラントリーを批判していたのは、このような主題の多様性・逆転という理由からであったのである。1743年に彼はイタリア人のある貴族に明言している。「私が常に偶像視していたのはその単一性に対してでした<sup>99)</sup>。」この発言こそヴォルテールが筋の単一性を崇拝していた、ということの何よりの証拠であるが、実のところ彼はクレビヨン

---

d'Olivet, 20 août 1761, *GC*, t. VI, p. 533.

97) *Lettres sur Œdipe*, « 5<sup>e</sup> lettre », *OC*, t. 1 A, pp. 365-366.

98) *Ibid.*, « 4<sup>e</sup> lettre », pp. 356-357.

99) *Méropé*, « Lettre à M. le marquis Scipion Maffei », éd. Jack R. Vrooman et Janet Godden, *OC*, t. 17 [1991], p. 231.

と仲違いをする以前にずっと胸に秘めていた思いを打ち明けている。「私は20年も前から惨めな恋愛によって古代の最も美しい主題の価値が落とされるのを憤慨の気持ちで見っていました<sup>100)</sup>。」この意見が述べられているのは1749年なので、20年前といえは1729年ということになる。つまり、ヴォルテールは直接口には出さなかったものの、当時からすでにクレビヨンの『エレクトラ』のギャラントリーに不満を持っていたのである。こうした事実から彼は突然クレビヨンを批判した訳ではないということが分かる。また1738年にも言っている。「クレビヨンの『エレクトラ』において、すっかり2組のカップルの野遊び (partie carrée) が確立されたのが見出されます<sup>101)</sup>。」ここではこう指摘されているだけであるので、この発言だけではヴォルテールが批判的に言ったのかどうかは判断することはできない。しかし今後この「2組のカップルの野遊び」という語が、軽蔑的に用いられているのをよく目にすることができることから<sup>102)</sup>、すでにこの時点でヴォルテールの中には、公にはしないものの色恋話の挿入に対する批判がすっかり出来上がっていた、と考えられる。1つだけ例を挙げれば、1762年にヴォルテールはこの用語と筋の単一との関係に触れながら、クレビヨンの『エレクトラ』についてこう述べている。

とりわけ人々は、エレクトラとテュエステスの息子 [「テュエステスの孫」あるいは「アイギストスの息子」の間違い] イティスと、イピアナッサと最終的にオレステスと認知されるティデとの2組のカップ

100) Lettre à Claude-Henri de Fuzée de Voisenon, 4 septembre 1749, *GC*, t. III, p. 104.

101) Lettre à Frédéric, prince héritier de Prusse, 5 février 1738, *GC*, t. I, p. 1086

102) Lettre au comte d'Argental, 21 août 1749, *GC*, t. III, p. 87 ; Lettre à Mlle Clairon, 7 août 1761 : Lettre à Marie-Élisabeth de Dompierre de Fontaine, vers le 1<sup>er</sup> février 1762, *GC*, t. VI, p. 502 et 784 ; Lettre à Jean-François de La Harpe, 25 mai 1764, *GC*, t. VII, p. 717 ; Lettre à Jean-François Marmontel, 1<sup>er</sup> novembre 1769, *GC*, t. X, p. 31 ; Lettres au duc de Richelieu, 26 août et 20 septembre 1773, *GC*, t. XI, p. 445 et 466.

ルの野遊びについて非難していました。これらの恋愛話は「悲劇作品における」結び目に何も寄与していないだけに、それだけ一層咎められるべきものなのです<sup>103)</sup>。

この見解からも「2組のカップルの野遊び」という言葉が、批判的な意味で用いられていることが分かる。したがって1738年に手紙を書いた当時のヴォルテールの心境は、明らかに『エレクトラ』に対する不満で満たされていたのであった。何より大事なことは、色恋話は筋の単一を妨げるという点をヴォルテールが強調していることである。もちろんそれはギリシア悲劇のこの功績を彼がいかに重んじていたかということの表れでもあった。

## 2. 人物描写

続いてクレビヨンの『エレクトラ』の批判から見えてくるものは、ギリシア神話の登場人物の性格と悲劇の関係についてのヴォルテールの見解である。彼はギリシア3大悲劇詩人の名を挙げながら述べている。

エレクトラは3つのギリシア悲劇の中では恋をしていません。ここにその理由があります。[登場人物の]性格はソフォクレス、エウリピデス、アイスキュロスの悲劇で付与されておりましたように、その正しさが認められているのです。というのも、性格は古代人には明らかになっていたのであります。彼らは決して公認の意見から逸れることはありませんでした。「メデイアは残忍で強情であるように」<sup>104)</sup>。

103) *Éloge de M. de Crébillon*, « *Électre* », OC, t. 56A, p. 302.

104) *Dissertation sur les Électre*, OC, t. 31A, p. 584. 文末の括弧の言葉はホラティウスの引用による。Horace, *Art poétique*, dans *Épîtres*, éd. et trad. François Villeneuve, Les Belles Lettres, coll. « Collection des Université de France », 2002, v. 123.

この最後のホラティウスの一文は、古代ローマ詩人よりも前にまさしくアリストテレスがすでに説いていた考え方である。ギリシアの哲学者は言っている。

性格に関しても、出来事の組織的な組み立てと同じように、必然的なこと、あるいはありそうなことを常に求めなければならない。このような性格の持ち主なら、このような事柄を述べたり行ったりすることが、必然的なこととして、あるいはありそうなこととして、展開されなければならない<sup>105)</sup>。

アリストテレスにとって、登場人物の言行は彼らにそれぞれ備わった性格に応じて適切に描かれることが、悲劇には必要不可欠な要素の1つなのである。なぜならこのような人物描写は普遍性を生むからである。だがヴォルテールと同じフランス人であり、彼の一世代前に生きたボワローの方が、アリストテレスよりもさらに具体的に述べていた。

激し易くなく血気に逸ることのないアキレウスは不快感を与えるだろう。

私は彼が侮辱に対して涙を注いでいる姿を見たい。

彼の描写の中で示された些細な弱さにこそ、

精神は喜びを持ってその自然さを認める。

あなた方の書き物でもこの手本に従って彼が描かれるように。

アガ멤ノン<sup>106)</sup>は尊大で、傲慢で、欲得づくであるように。

アエネーイスは彼の神々に対し峻厳な畏敬の念を持つように。

それぞれの人物に相応しい性格を保持するように<sup>106)</sup>。

105) Aristote, *La Poétique*, éd. et trad. Roselyne Dupont-Roc et Jean Lallot, Seuil, 1980, chap. 15, v. 1454a33-1454a36.

106) Nicolas Boileau-Despréaux, *L'Art poétique*, dans *Œuvres complètes*, éd. Françoise Escal,

これらの見解から、クレビヨンの『エレクトラ』に対するヴォルテールの批判は、彼らの登場人物の性格に関する考えに基づいていることが確認できる。神話において確立され長い歴史を通じて人々に受け入れられ続けてきた人物の性格を、クレビヨンによって変質させられたことがヴォルテールには許せなかったのである。今度は彼自身がホラティウス、アリストテレス、ボワローの演劇論をまとめた形で述べている。

ポリュクセネとイピゲネイアがあだっぼいということがあり得ないのと同じくらい、エレクトラが恋をするということはありませんでした。メデイアが温和で思い遣りがあり、アンティゴネが弱々しく臆病であるということも考えられないことでした。彼女らの感情は常にこれらの人物と状況に一致していたのです。エレクトラの口から洩れるたった一言の優しい言葉でさえも、世界で最も美しい戯曲を地に落とさせたことでありましょう。なぜならこうした言葉は、復讐以外のことは渴望すべきでない、アガ멤ノンの娘に特有の性格と恐ろしい状況に反したことでありましょうから<sup>107)</sup>。

神話の登場人物の性格に逆らうような描写は、彼らのイメージを崩してしまうだけでなく、戯曲そのものの価値までも貶めてしまうのである。10年後にも彼は繰り返す。「エレクトラという名前自体が「弱さのない」を意味し、自分の父親の復讐以外には決して他の感情を抱かない者として、古代全体を通して演じられてきた [...] エレクトラに恋をさせたのは、大きな過ちであるということを認めねばなりません<sup>108)</sup>。」クレビヨンが自分の戯曲において、エレクトラの性格には全く縁のない恋情を彼女に与えたことによって、クリュタイムネストラとアイギストスに対し

---

Gallimard, coll. « Bibliothèque de La Pléiade », 1966, chant III, v. 105-112.

107) *Dissertation sur les Électre*, OC, t. 31A, pp. 584-585.

108) *Éloge de M. de Crébillon*, « *Électre* », OC, t. 56A, p. 302.



て、アガメムノンの復讐を果たすことだけが生き甲斐であった彼女の揺るぎないイメージが、無残にも捻じ曲げられてしまったのである。さらにヴォルテールはエレクトラだけでなくオレステスにも言及している。

オレステスとエレクトラが不幸であればあるほど、彼らには幼稚で常軌を逸した愛について考える余地はなく、彼らはあまりにも自分たちの不幸と復讐に心を奪われていたため、アガメムノンの死刑執行人であり彼らの最も容赦のない敵の2人の子供たちに、2組のカップルの野遊びを結び付けながら、彼らが無駄な時間を過ごすことなどできはしなかったと、[クレビヨンを擁護する者たちに]アテネの民衆は答えたことでしょう<sup>109)</sup>。

復讐を主題とする悲劇には何の関係もない登場人物の恋愛感情は、ギリシア人には思いもつかなかったであろうと、ヴォルテールは古代人の感情を代弁している。そこで彼自身も『オレステス』という題名でクレビヨンに対抗した。彼は自分の作品を3人称でこう評している。「彼はエレクトラと彼女の弟が、彼らの苦しみと父親の復讐だけに絶えず心を奪われ、他のどんな感情も入る余地がないように描きました。これこそがまさしくソフォクレス、アイスキュロス、エウリピデスが彼らに与えている性格なのです<sup>110)</sup>。」当時のギリシアが要求していた本来の姿にエレクトラとオレステスを立ち返らせることができたことにヴォルテールは満足を感じているのである。

そしてクレビヨンの『カティリーナ』で描かれているキケロが貶めら

109) *Dissertation sur les Électre*, OC, t. 31A, pp. 588-589.

110) *Ibid.*, p. 593. 上演の2週間前にも彼は手紙の中で宣言している。「『オレステス』という題名のもと、私の方法で『エレクトラ』が上演されるでしょう。この作品がクレビヨンのよりも価値があるかどうかは分かりません。[...] ですが、少なくともエレクトラは恋をする女ではありませんし、オレステスも恋する男ではないでしょう。」 *Lettre à Frédéric II*, 31 décembre 1749, GC, t. III, p. 148.

れたことに対して、ヴォルテールが批判していたことはすでに見たが、これもやはり悲劇の登場人物の描写に関わることであろう。彼は「あるがままのこの偉大なる人物」を描くという欲求によって、1週間で『救われたローマ』を書き上げるほどの熱情に駆られた自己について語っている<sup>111)</sup>。またフリードリヒ2世の書簡では王の考えを確認している。「陛下は正しくもそこ [=クレビヨンの『カティリーナ』] では、ローマの歴史が完全に損なわれていると判断しておられました。カティリーナには風変わりな悪党の役を、キケロには間抜けの役が与えられたと陛下は思っておられました<sup>112)</sup>。」ヴォルテールは半年前にフリードリヒ2世から受け取った手紙の中で述べられていた見解を繰り返すことで、自分も全くプロシア王と同意見であるということを強調しているのである。そして今度はヴォルテール自身が自分の『救われたローマ』を採り上げながら、考えを示している。「彼 [=クレビヨン] の悲劇は全くの創作でしたので、私は歴史修史官の資格で私の悲劇を制作いたしました。私は実際そうであったようにキケロを描くことを望んだのでした<sup>113)</sup>。」この発言には劇作家でありながら同時に歴史家でもあるというヴォルテールの自負心が表れている。つまり悲劇作品であろうと歴史に基づいて人物像を忠実に描くことの重要性を彼は訴えているのである。2日後にはパリ高等法院長のエノーと自分の作品について言及している。

彼はクレビヨンが人間の中で最も愚か者として描いた怪物のような笑劇に憤慨しております。[私の] カエサルとカティリーナの場面は全ての人を、とりわけ彼を喜ばすことでしょう。ローマの歴史について少しでも知識のある人なら、この忠実な絵画を目にしても腹を立てる

111) Lettre à Charles-François Hénault, 14 août 1749, *GC*, t. III, p. 80.

112) Lettre à Frédéric II, 17 août 1749, *GC*, t. III, p. 84.

113) Lettre à Anne-Marie Fiquet du Bocage, 21 août 1749, *GC*, t. III, p. 88.

ようなことはない、と確信して下さい<sup>114)</sup>。

確かに作品というものは物語を脚色することによって人を楽しませるものであるが、ヴォルテールには世間で通説となっている人物や歴史は「忠実な絵画」でなければならないのである。それにこうした描写でも人の関心を削ぐことはないであろう、と信じている。そしてこのヴォルテールの考え方も、クレピヨンと不和になる前の1735年に、ダルクール学院において上演された『カエサルの死』の「序文」の中で確認することができる。

多くの人々が彼 [=ヴォルテール] の戯曲においてあまりに多くの残忍さを見出します。彼らは恐怖を持って、ブルートゥスが彼の恩人であるだけでなく、自分の父親でもある [カエサルを]、祖国愛のために犠牲にするのを目にします。ブルートゥスはこういう性格であったのであって、またそうであったように人間たちを描かねばならない、としか答えるべきことはありません<sup>115)</sup>。

モンテーニュが言及しているように、ヴォルテールもブルートゥスをカエサルの息子と見なして彼らを描いている<sup>116)</sup>。実の息子をして実の父親を殺害させることで、観客により恐怖心を呼び起こしてしまうことになるのであるが、だからといってブルートゥスの厳格なまでの美德を弱めるのではなく、史実に基づいて父を殺すほどまでに祖国愛に駆られたありのままの息子の性格を描くことが、ヴォルテールにとっては大事だっ

114) Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 23 août 1749, *GC*, t. III, p. 89.

115) *La Mort de César*, « Préface des éditeurs » [1736], éd. D. J. Fletcher, *OC*, t. 8 [1998], p. 251.

116) Lettre à La Marre, 15 mars 1736, *GC*, t. I, p. 750. Voir Michel de Montaigne, *Les Essais*, éd. Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, Gallimard, coll. « Bibliothèque de La Pléiade », 2007, liv. II, chap. 33, p. 766.

たのである。また『カエサルの死』に関連して、この悲劇より5年前の1730年に上演された『ブルトゥス』においても、紀元前509年に共和制となったローマの初代執政官ブルトゥスが、陰謀を企てた2人の息子ティトゥスとティベリウスを実の子であるにもかかわらず、祖国のために犠牲にするという厳格な父親の性格を緩和することなくヴォルテールは描いている。彼は悲劇における描写についてフリードリヒ2世に述べている。「私は単に舞台上で真実の行動を見せることを言い張ったのではなく、真実の習俗を見せることを主張したのであり、人間たちが置かれている状況の中で、彼らが考えているように彼らに考えさせなければならぬと主張したのです<sup>117)</sup>。」ヴォルテールはこの手紙においても、プロシア王に悲劇で描かれる習俗・登場人物の真実性を強調している。だからこそ彼は『オレステス』を執筆した時には、習俗だけに限らずリアルで常に一貫した性格も描くことを自分に言い聞かせていたのである<sup>118)</sup>。さらにヴォルテールは『救われたローマ』の「序文」で、より具体的に自分の見解を説いている。

彼ら [= 学者たち] は悲劇が歴史ではないということを十分確信しています。しかし彼らはそこに当時の真実の習俗の絵画を目にすることでしょう。キケロ、カティリーナ、カエサルがこの戯曲で行ったことは真実ではありません。しかし彼らの天分、彼らの性格はそこでは忠実に描かれているのです<sup>119)</sup>。

117) Lettre à Frédéric II, 20 janvier [décembre] 1740, *GC*, t. II, p. 472.

118) *Dissertation sur les Électre*, *OC*, t. 31A, p. 572.

119) *Rome sauvée, ou Catilina*, « Préface » [1752], éd. Paul O. LeClerc, *OC*, t. 31A, p. 149. 1764年にもヴォルテールは繰り返している。「悲劇は歴史の国なのです。あるいは少なくとも事実の本当らしさと習俗の真実によって、歴史と似たあらゆるものの国なのです。」「悲劇 […] は人間たちの素行を彼らがそうであったように描かなければなりません。」*Commentaires sur Corneille* [1764], « Remarques sur *Les Trois Discours* », éd. David Williams, *OC*, t. 55 (III) [1975], p. 1029 et 1034.

悲劇における登場人物の発言や行動が本当に行われたかどうかは定かではない。しかし史実で語られている彼らの姿を正確に写し取り、そのような人物ならば当然そうするであろう言動をとらせることが重要である、とヴォルテールは主張する。だからこそ彼は、クレビヨンの『エレクトラ』に見られるアガメムノンの娘と息子、あるいは『カティリーナ』のキケロの人物描写を激しく非難していたのである。最後に1773年に『ザイール』と『救われたローマ』をフェルネーの自宅で上演した彼は言っている。「私は驚くべき成功でもって、リュジニャンとキケロを演じました。しかしそれは蛮人クレビヨンのキケロではありませんでした<sup>120)</sup>。」ヴォルテールはライバルの戯曲に登場するローマの雄弁家とは違う彼を描くことができたことに満足感を覚えている。いやむしろ誇らしげでもある、と言ってもよい<sup>121)</sup>。

### 3. 恐れと憐れみ

ヴォルテールはクレビヨンの『セミラミス』における王妃の狂気的な愛と、『アトレウスとテュエステス』に挿入された無味乾燥な愛を批判していたが、その理由をすでに1743年に彼は書簡の中で述べていた。「彼 [=クレビヨン] は自分の息子を愛するセミラミス、アトレウスのみならずセミラミスにも悔悟の念も与えることなく登場させたのです<sup>122)</sup>。」ヴォルテールがライバルの両作品を非難していたのは、悲劇において罪を犯した者が後悔の念に苛まれる姿が描かれていないからであった。6年後に彼はフリードリヒ2世にも繰り返している。

そこでもしあなた様が詳細に立ち入ることを私にお許し下さるので

120) Lettre au duc de Richelieu, 4 juin 1773, *GC*, t. XI, p. 373.

121) 彼はライバルの『カティリーナ』の上演当時の成功を、「束の間の成功ほど恥ずべきものは何もありません」と軽蔑を込めて言っていた。Lettre à Georg Conrad Walther, 18 mars 1752, *GC*, t. III, p. 637.

122) Lettre à Marie-Françoise Dumesnil, 4 juillet 1743, *GC*, t. II, p. 730.

したら、陛下が私に話して下さいました昔の [クレビヨンの] 『セミラミス』は全く価値がないということを、[...] 陛下がお認めになっておられると私は僭越ながら信じております。ではどうして彼ら [=民衆] は満場一致でこの悲劇を非難するのでしょうか？それは自分の息子に対する母親の恋情、悔悟の念に齒向かうようなこの恋情が人を憤慨させ、憎むべきものだからです<sup>123)</sup>。

罪びとの後悔よりも異性間における愛の感情が優先されていることは、観客にも読者にとっても許せないことなのである、とヴォルテールは悲劇と悔悟の念との重要な関係性を説いている。そこで、先ほどのクレビヨンの『セミラミス』と同じ場面を、ヴォルテールの『セミラミス』でも見てみよう。彼の悲劇においてもライバルの作品と同じように、セミラミスはアルザスという青年を息子とは知らずに愛してしまう。しかし、彼が実の子のニニアスであると分かるとすぐに、彼女は自分を責める。

この罪人であり、不幸な女を罰しなさい。

私の血の中で私の忌むべき炎を消しなさい。

騙された自然の感情は2人には恐ろしいものなのです。

私の大罪に対し復讐をしなさい。父親の死に対し復讐をしなさい。

我が息子よ、私を認めなさい、私を刺しなさい。そしてお前の母親を罰しなさい<sup>124)</sup>。

クレビヨンのセミラミスとは違ってヴォルテールでは、自分がニニアスの母親であることを彼女はすぐに認め、実の息子に対して今まで抱いていた愛を恥ずべき情念と見なし、自分を罰するよう命じている。それと同時に彼女は最愛の息子の父親を殺害してしまったという罪の意識から、

123) Lettre à Frédéric II, vers le 25 avril 1749, GC, t. III, p. 44.

124) *Sémiramis* [1748], éd. Robert Niklaus, OC, t. 30A, IV, 4, v. 280-284 [Sémiramis].

決して許されることのない自分の過ちに対しても償うことを切に望んでいるのである。しかも母親であることを認識した彼女は、ニニアスに自分の正直な感情も打ち明ける。

ああ！ 私は無慈悲だったのだ。今度はお前の番で残酷になりなさい。私から命を奪いながら、ニニユスの息子であることを示しなさい。刺しなさい。しかし何ということが！ お前の涙が私の涙と混じり合うとは！  
 おお、ニニアスよ！ おお、恐怖と魅力に満ちた日よ！  
 お前が私に対し果たさねばならない死を与える前に、自然の感情の声を今一度話させておくれ。  
 罪を犯したお前の母親の涙が、これほどまでに致命的でありながらもこれほどまでに愛しい手を濡らすのを、少なくとも許しておくれ<sup>125)</sup>。

セミラミスはどんなに息子に憎まれようとも、掛け替えのない息子を愛している。このような母性愛に満ちた感情は、セミラミスが息子によって刺された時の彼女の態度を確認することで、さきほどのクレビヨンの母親とはどれほど違うかがはっきりするだろう。そして、ヴォルテールでは最終的にセミラミスは息子に刺され命を落とすことになるのだが、彼女はニニアスにこう思いを述べている。

ニニユスが死んだ時、私はもっと罪人であった。  
 私は十分報いを受けた。したがってこの世には、神々の怒りが決して許さない大罪があるものなのだ。  
 ニニアス、アゼマよ、お前たちの結婚が、私の罪によってお前たちの一族を汚した恥辱を消し去ってくれるよう<sup>126)</sup>。

125) *Ibid.*, IV, 4, v. 289-296 [Sémiramis].

126) *Ibid.*, V, 8, v. 260-264 [Sémiramis].

アゼマとはアッシリア王国を建設したベリュスの血を引く王女のことであるが、セミラミスは先ず自分を罪びとと認め、息子と彼の許婚に許しを乞うている。それから最後に彼女は息子に言う。「私には死が感ぜられる。死が迫っている。セミラミスのことを思っておくれ。／彼女の思い出を憎まないでおくれ。おお、我が息子よ。私の愛しい息子よ<sup>127)</sup>。」セミラミスは自分が母親であるということを自覚し、自然の感情を持って息子に呼び掛けているのである。実際このようなヴォルテールの描くセミラミスに対して、当時の批評家デュピュイ＝ダンボルトは、クレビヨンの王妃のように罪の中で彼女を死なせ、彼女のライバルを破滅させるほどの狂気的な激情を推し進めるべきであったと苦言を呈しているが<sup>128)</sup>、それでもやはりヴォルテールは、クレビヨンの常軌を逸したセミラミスではなく、罪の意識から生じる後悔に苛まれながらも、息子と彼の恋人との幸せを祈り、息子を愛おしく思いながら息を引き取るという母親の愛の情景を描きたかったのである。何よりヴォルテールにとってこの悔悟の念は悲劇には必要不可欠な要素であった。この見解についてはすでに彼は、1725年の『ヘロデとマリアンヌ』の「序文」や1730年の『ブルートゥス』に付された『悲劇論』でも、もちろん1748年の『セミラミス』に付された『古今の悲劇についての論考』はもとより、1764年の『コルネイユ論』においても、後悔に打ちのめされる罪びとの重要性を説き、その姿を見せることが悲劇における教育であると断言さえしている<sup>129)</sup>。

127) *Ibid.*, V, 8, v. 269-270 [Sémiramis].

128) Jean-Baptiste Dupuy-Demportes, *Parallèle de la Sémiramis de M. de Voltaire et de celle de M. de Crébillon*, chez Jacques Clousier, 1748, p. 19.

129) *Hérode et Mariamne*, « Préface » [1725], éd. Michael Freyne, *OC*, t. 3 C, 2004, p. 185 ; *Brutus*, « Discours sur la tragédie à milord Bolingbroke » [1731], éd. John Renwick, *OC*, t. 5 [1998], p. 177 [var.] ; *Sémiramis*, « Dissertation sur la tragédie ancienne et moderne » [1749], *OC*, t. 30A p. 163 ; *Commentaires sur Corneille*, « Remarques sur *Médée* », *OC*, t. 54 (II) [1975], p. 36. さらにヴォルテールはコルネイユが自身の『マイデア』をセネカを基に創作したことが原因で、女主人公



だがこの悔悟の念にしても、『セミラミス』で見られたような母親の愛にしても、それはやはり行きつく所はアリストテレスの説いていた憐れみを人々の心に吹き込むためなのである<sup>130)</sup>。

そしてライバルの『セミラミス』を非難するかたわら、ヴォルテールは彼の『アトレウスとテュエステス』について、1762年にこんなことを言っていた。「『アトレウス』の大きな過ち、それはこの戯曲は面白くないということです<sup>131)</sup>。」10年後にも彼は繰り返している。「したがって一体どうしてクレビヨンの『アトレウス』は、決して再演されなかったのでしょうか？スペクタクルが残忍であるだけでは十分ではなく、さらに戯曲は上手に興味深く書かなければならないのです<sup>132)</sup>。」この悲劇は面白くないがゆえに誰の興味も惹くことはできぬ、とヴォルテールは強調している。それでは、どうしてライバルの悲劇は人々の関心を惹くことができないのであろうか？ヴォルテールはアトレウスの行動について述べている。「クレビヨンの具合の悪いことの1つ（彼の不都合は数えきれないほどありますが）は、20年後に寝取られたことの復讐をし、気晴らしに復讐をしたことです<sup>133)</sup>。」ヴォルテールは時間的な問題に着眼して

---

に僅かながらの後悔さえも与えていないことを批判している。Ibid., pp. 30-31.

130) Aristote, *La Poétique*, op. cit., chap. 6, v. 1449b28-1449b30 et chap. 14, v. 1453b16-1453b21.

131) *Éloge de Monsieur de Crébillon*, « Atrée », OC, t. 56A, p. 298.

132) Lettre à Joseph Vasselier, 13 septembre 1771, GC, t. X, p. 817. クレビヨンの『セミラミス』についても、「この戯曲は完全に失敗したのです。それは生まれながらに死んだのであり、決して蘇ることはありませんでした。それはひどく書かれ、筋運びもまずく、そして興味深さに欠けているのです」と非難している。Lettre à Frédéric II, 17 mars 1749, GC, t. III, p. 32.

133) Lettre au marquis de Thibouville, 9 janvier 1771, GC, t. X, p. 578. 1774年にジェラルド・デュドワイエ・ド・ガステルの『執念深い男』という戯曲が上演された時、ヴォルテールはクレビヨンを揶揄している。「『アトレウス』を上演さえすればよかったのです。それは人が今まで知っている最高級に復讐心の強い男なのです。」「クレビヨンの『アトレウス』は、『執念深い男』という題名をつけること

いるのである。この観点に立って彼は具体的に見解を述べている。

[アトレウスの] いかなる必要性もない冷徹に心の中で練られた恐ろしい復讐心を、人々は何ら共有することはできません。20年前にアトレウスに対してなされたひどい侮辱は、誰の心にも衝撃を与えません。大きな罪は必要ですが、恨みが極みに達している内に罪は犯されなければなりません。古代人たちが侮辱を受けた直後にアトレウスの復讐を描く時、彼らは現代人たちよりも人間の心理を充分理解していたのです<sup>134)</sup>。

20年も前に受けた辱めは本人には決して忘れられないものではあるが、観客にとっては遠い過去のものであり、妻を奪われた者が行う復讐に対し同調する気にもなれない。したがって、アトレウスの復讐に誰も興味を覚えることはできない、とヴォルテールは判断を下している。この見解にも当時のギリシア詩人に対する彼の高い評価が窺われる。9年後にも彼は繰り返すだろう。

最初の過ち、それはある者 [=テュエステス] が別の者に [=アトレウス] に味わさせた20年前の侮辱に、彼が復讐をするために露わにする憤りなのです。私たちはこのような激昂に興味を覚えませんし、凌辱された者の魂を苦しめたに違いない直近の侮辱に対して激怒が掻き立てられた時にしか、我々はこの憤激を許さないのです<sup>135)</sup>。

ここでは凌辱を受けた者を罪へと掻き立てる感情とそれを眺める側との

---

も十分にできたことでしょう。」Lettre au comte de La Touraille, 5 juillet : Lettre au comte d'Argental, 6 juillet 1774, *GC*, t. XI, p. 719 et 721.

134) *Éloge de Monsieur de Crébillon*, *OC*, t. 56A, « *Atrée* », pp. 298-299.

135) *Les Pélépides, ou Atrée et Thyeste*, « Fragment d'une lettre », *OC*, t. 72, p. 37.

心理が示されている。先ほどの引用と照らし合わせるならば、侮辱された直後に引き起こされる感情は、その者の怒りに真実味を与え、そこから引き起こされた復讐心は観客にも伝わり、主人公と同じ感情を彼らも共有することができる、とヴォルテールが考えていることが理解できる。そして、彼がこのような提案をする目的は、憐れみと同じように人々の感情に恐れを引き起こすためであると思われる。というのも、彼は『アトレウスとテュエステス』を次のように批判していたからである。「2つ目の過ち、それは第1幕で嫌悪すべき行動を心の中で練り、何らいかなる窮地も、障害も、危険もなく第5幕でそれを実行する男 [=アトレウス] は、恐ろしいというよりかなり冷徹な男であるということです<sup>136)</sup>。」20年経った今になってやっと自分の仇を討つだけではなく、その上復讐が計算し尽くされ簡単になされたとするならば、アトレウスはもはや観客に恐れを引き起こす人物ではなく、むしろただの冷静沈着な策士でしかなくなってしまう、ということである。ヴォルテールはこのようにこのクレビヨンの作品を、人々に恐れを引き起こすための悪しき例として採り上げている。その上ヴォルテールは、アトレウスが復讐を苦も無く実行した後の劇作術にも触れている。「人が怒りの激発と呼んでいるもので終わらなければならない、と私は主張します。つまり神々の懲罰です。アトレウスは罰せられるのに十分値するのです<sup>137)</sup>。」罪を犯した者に対する神の厳格な制裁も十分に恐れを吹き込むことができる、とヴォルテールは考えている。さらに彼はクレビヨンの1714年に上演された戯曲についても言及している。「『クセルクセス』という悲劇の中のこの恐怖はかなり度を越していますので、民衆は憤慨のこもったヤジを飛ばそうとする代わりに笑ってしまうのです<sup>138)</sup>。」恐怖を前面に出し過ぎるとかえって逆効果を生むというのである。

---

136) *Ibid.*, pp. 37-38.

137) *Lettre au marquis de Thibouville*, 20 février 1771, *GC*, t. X, p. 630.

138) *Éloge de Monsieur de Crébillon*, « *Xerxès* », *OC*, t. 56A, p. 316.

そしてこの恐れを重要視していたヴォルテールの態度を考慮するならば、彼が『エレクトラ』に対してあれほどまでにギャラントリーの挿入を批判していた理由も自ずと見えてくる。彼にとって「恋愛話は激しい恐怖を伴う主題の価値を下げてしまう<sup>139)</sup>」のであったのだ。だからこそヴォルテールはギャラントリーの挿入が避けられない場合の条件として1730年に、「愛が悲劇的な演劇に値するためには、戯曲の必要な結び目でなければならない<sup>140)</sup>」と述べていた。これは愛だけが主題とならなければならない、ということであろう。また逆説な言い方ではあるが、13年後にヴォルテールはこの考えをより明確にしている。「もし愛が悲劇的でなければ、それは無味乾燥なものなのです。そして愛が悲劇的であるのでしたら、それだけが支配しなければなりません。この愛には2番目の座は設けられていないのです<sup>141)</sup>。」恐れを弱めるような生ぬるい愛ではなく、悲劇的な愛こそが不可欠であり、さらにそれだけが唯一の主題とならなければならない。つまりここでも恐れ conditions に筋の単一が結び付けられているのである。そして再びクレビヨンの『エレクトラ』に戻り、ヴォルテールは言い切っている。「ソフォクレスの戯曲に寒々とした恋人たちの2組のカップルの野遊びを挿入させることは、ヨーロッパの良識ある人々が我々をずいぶん非難している愚かな行為なのです。獐猛で悲劇的でない愛は全て、劇場から追放されなければなりません<sup>142)</sup>。」こうした彼の考えを踏まえると、結局クレビヨンに対してなされた劇作術に関する数々の批判は、ライバルの悲劇では恐れと憐れみを人の心に引き起こすことができないという、正しいか否かは別としてヴォルテールの信念から来ているということが分かる。だがここでクレビヨンの名誉のためにも付言しておこう。確かにヴォルテールは至るところで『エレクト

139) Lettre à la duchesse du Maine, 14 août 1749, *GC*, t. III, p. 79.

140) *Brutus*, « Discours sur la tragédie à milord Bolingbroke », *OC*, t. 5, p. 183.

141) *Méropé*, « Lettre à M. le marquis Scipion Maffei », *OC*, t. 17, p. 220.

142) Lettre à Mlle Clairon, 7 août 1761, *GC*, t. VI, p. 502.

トラ』に見られるギャラントリーの挿入と、次の章で明らかにするようにこの悲劇の韻文詩に対して激しく批判をするのだが、ただこの作品から2組の恋愛話を排除した場合には「悲劇的な作品」であると高く評価していたのも事実である。またとりわけ『ラダミストゥスとゼノビア』（これも韻文詩を除けば）については、彼が若い時から晩年に至るまで「悲劇的な作品」であり「大変興味深い作品」であると心から賞賛し続けていた<sup>143)</sup>。しかしそうは言っても、やはり悲劇における甘い恋愛話の挿入は、恐れと憐れみの視点に立てば優れた理想の戯曲であっただけに、ヴォルテールには非常に悔やまれた違いない。だからこそ、余計に批判に熱が入ったとも考えられる。そして話を戻せば彼は断言している。「恐れと憐れみのないところに成功はありません<sup>144)</sup>」と。この成功というのは観客数や興行収益に関する成功というよりも、悲劇における使命の達成度という意味での成功であろう。そして彼がどうしてそれほどまでに憐れみと恐れを重要視していたかについては、彼は述べている。「ギリシアの演劇はギャラントリーの助けを借りずに、恐れと憐れみによって素行を改めることを目指していました<sup>145)</sup>。」悲劇を通じて人々の更生を目指していたヴォルテールには、ギリシア悲劇の根底をなす恐れと憐れみの感情ほど効果的なものはないと思われたのである。最終的に彼は「恐れと憐れみは、悲劇の唯一の目的で唯一の構成組織である<sup>146)</sup>」と両者の

---

143) Lettre à François-Augustin Paradis de Moncrif, 3 janvier 1732, *GC*, t. I, p. 311 ; Lettres à Frédéric II, 17 mars et vers le 25 avril 1749, *GC*, t. III, p. 32 et 45 ; Lettre à Michel-Paul-Guy de Chabanon, 13 janvier 1766, *GC*, t. VIII, p. 334. またヴォルテールは「『ラダミストゥスとゼノビア』は、『フェードル』を読んだ後でさえも私を感動させました」と、クレビヨンの作品をラシーヌに引けを取らない悲劇と絶賛している。Lettre au marquis de Vauvenargues, 15 avril 1743, *GC*, t. II, p. 718.

144) Lettre à Frédéric II, 17 mars 1749, *GC*, t. III, p. 33.

145) *Dissertation sur les Électre*, *OC*, t. 31A, p. 587.

146) *Olympie*, « Remarques à l'occasion d'*Olympie* » [1764], éd. Theodore E. D. Braun, *OC*, t. 52 [2011], p. 362.

関係を定義していた。

## V. クレビヨンの作詩法への批判

それでは本論の締めくくりとしてクレビヨンの詩作に関するヴォルテールの批判を調べよう。実際1718年に彼が『オイディプス』で悲劇作家としてデビューする1か月前に、ルイ・ラシーヌ宛ての手紙の中で彼はこう書いていた。

あなたのお宅に寄らずに自分の家へ帰ったことをとても悔やんでおります。カニヤック氏がオルレアン公の御殿に私を連れて行くために迎えにきました。私は3時までそこにおりましたが、私があなたに抱いております友情よりも追従者の役目を選んだことにとても恥じ入っております。したがって、私は『セミラミス』をいつか全部理解するという罰を自分に課すことをあなたに誓います<sup>147)</sup>。

この手紙にあるオルレアン公とは摂政フィリップ・ドルレアンのこと、カニヤック氏とは摂政の親友なのだが、それよりもヴォルテールが「全部理解するという罰」と述べている真意はどこにあるのだろうか？確かにこれは冗談っぽく聞こえるのだが、実のところ彼には当時からクレビヨンの韻文詩にも不満に思うところがあったのではなかろうか？というのも彼はライバルの詩をこう激しく非難しているからである。「この『セミラミス』は1人の愚か者によって書かれた狂人の作品です。常識を持っている韻文詩は2行とは続きはしません。そして、一般的に言って彼ほどひどい作家はまずおりません<sup>148)</sup>。」批判というよりもほとんど侮辱に近いものがあるが、この発言を参考にするのであれば、30年前に書かれた先の手紙の中でヴォルテールは、クレビヨンの『セミラミス』は主

147) Lettre à Louis Racine, octobre 1718, GC, t. I, p. 54.

148) Lettre à Mme Denis, 24 décembre 1748, GC, t. II, pp. 1301-1302.

題に加え韻文詩までもが、常識ある万人には到底理解できないほどの支離滅裂な文体で書かれている、と言いたかったのではないのだろうか。だからこそ、この作品を読むということは、大変骨の折れるいやむしろ苦痛とっていいほどの厳罰に近いものに彼には思われたのかも知れない<sup>149)</sup>。当時1か月前に文壇デビューを控えた23歳のヴォルテールは敢えて口には出さなかったが、1749年になって彼ははっきりと自分の見解を示したのである。もはや彼にはライバルに気を遣う必要はなくなったのであろう。6年後の1755年にはクレビヨンの別の作品を批判している。「パリでは悲劇の『三頭政治』が上演されました。私はそれを読みました。しかしその中で私は何一つ理解できませんでした<sup>150)</sup>。」この悲劇においてもクレビヨンの文章の分かりづらさが繰り返されている。さらにヴォルテールは同じ作品を馬鹿にする。「何とひどい韻文詩でしょう！どれほど多くの生硬さ、どれほど多くの誤用があることでしょう！もし人がこれらでお尻を拭いたなら、痔になってしまうことでしょう<sup>151)</sup>。」

---

149) さらに彼はライバルの『セミラミス』と『クセルクセス』の韻文について1761年に書いた、長文の手紙のおよそ10分の1にあたる部分だけをそのまま抜き取り、1774年に別の文通相手に送っている。この2通の書簡では両作品の韻文が引用され酷評されている。Lettre à Pierre-Joseph Thoulier d'Olivet, 20 août 1761, *GC*, t. VI, p. 532 ; Lettre au comte Paolo Emilio Campi, 8 juillet 1774, *GC*, t. XI, p. 724. Cf. Prosper Jolyot de Crébillon, *Xerxès*, *op. cit.*, IV, 2, v. 1188, 1190 et 1192 [Artaban] ; *Sémiramis*, *op. cit.*, III, 3, v. 899-900 [Bélus].

150) Lettre à la duchesse de Saxe-Gotha, 29 janvier 1755, *GC*, t. IV, p. 359. 他のもところでヴォルテールは、クレビヨンの作品を「訳の分からぬ話」「ちんぷんかんぷんの話」と馬鹿にしていた。Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 1<sup>er</sup> février 1762, *GC*, t. VI, p. 783 ; Lettre à Étienne-Noël Damilaville, 21 mai 1764, *GC*, t. VII, p. 708.

151) Lettre au marquis de Ximénès, 13 février 1755, *GC*, t. IV, p. 382. ヴォルテールはクレビヨンの韻文詩の「生硬さ」と「誤用」をよく強調している。Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 4 août 1762, *GC*, t. VI, p. 1002 ; Lettre à Nicolas-Sébastien Roch de Chamfort, mars 1764, *GC*, t. VII, p. 624 ; Lettre à Jean-François de La

彼らしい比喩を加えながらライバルの詩が嘲笑されている。そして今までに蓄積されたクレビヨンの詩作に対する不満の総決算としてヴォルテールは、1762年6月にライバルが亡くなったその2か月後に『クレビヨン頌歌』を出版するのである。この作品は頌歌というにはほど遠く、ほとんど諷刺的小論文で、ダランベールも故人に対する彼の無礼な振る舞いを激しく非難していた<sup>152)</sup>。しかし、実際ヴォルテールはその作品をすでに4月に完成しており、クレビヨンが亡くなる前に出版を考えていた<sup>153)</sup>。したがって彼はライバルの死を侮辱するために書いた訳ではないのであるが、この『クレビヨン頌歌』によってライバルを批判するだけでは飽き足らず、彼は『イドメネウス』がイタリア語に訳されると聞いてその翻訳者を論している。

あなたがおよそ60年前にパリで生まれるとすぐに死んでしまった悲劇『イドメネウス』を、イタリアで蘇らせたがっていると私に教えて下さったことに私は驚いております。この作品は今までに劇場に提供された最も無味乾燥な作品の一つであり、筋運びが悪いのと同時に上手く書かれていない作品なのです<sup>154)</sup>。

つまりヴォルテールにとってはクレビヨンの『イドメネウス』は翻訳するだけの価値のない作品なのである。2年の月日が流れた後でさえ彼は

---

Harpe, 2 juin 1768, *GC*, t. IX, p. 506.

152) ダランベールはヴォルテールに宛てた手紙の中でこう答めていた。「人々があなたに帰している『クレビヨン頌歌』は、いやそれよりもむしろ賛辞の名を借りた諷刺文は、何なのでしょうか？ [...] 私は彼の遺体に石を投げるために、彼が亡くなったこの時期を選んだことに大変腹を立てています。」Jean Le Rond d'Alembert, *Lettre à Voltaire*, 8 septembre 1762, *M*, t. 42 [1881], p. 231.

153) *Lettre à Étienne-Noël Damilaville*, 4 avril 1762, *GC*, t. VI, p. 858.

154) *Lettre au marquis Francesco Albergati Capacelli*, 25 aout 1762, *GC*, t. VI, pp. 1024-1025.



同じ翻訳者に「あなたのような良い画家はラファエルの作品しか模写するべきではないのです<sup>155)</sup>」と戒めている。1773年には自分が創作した悲劇『ミノスの掟』に関して、「私の韻文詩がクレビヨンの韻文詩によって醜くされました」と憤慨しているだけでなく、同じ戯曲がライバルの『カティリーナ』に取って替えられたことについては、「これほど洗練されていない他の悲劇を私は知りません」と、彼は容赦なくその作品の価値を全否定しているほどである<sup>156)</sup>。

こうしたヴォルテールの批判を見ていると、彼がクレビヨンの韻文詩に対してかなりの不満を抱いていたことが分かる。だがさらに彼の非難を読み続けていくと、ライバルとラシーヌの詩がたびたび比較されているということにも気がつくのである。1770年にヴォルテールはグリムにこう述べている。「ラシーヌの戯曲はクレビヨンの戯曲よりもいつも巧みに書かれているでしょう<sup>157)</sup>。」ここでは一言だけで済まされているが、ヴォルテールは1771年の『百科全書に関する疑問』で彼の詩に関する欠点を並べ挙げている。

あいまいな文章、不適切な用語、統辞法の誤り、理解できない言葉、非常に不正確でとてもひどく表現された思想、[...] 誇張された文体、平凡であると同時に無意味な付加形容詞と韻文詩で表現された怪物のような格言で満たされた文体。ラシーヌの文体の後に続いたのがこれなのです。そして、言語と趣味の頹廢を達成するために、これらの西

---

155) Lettre au marquis Francesco Albergati Capacelli, 3 mai 1764, *GC*, t. VII, p. 678. ヴォルテールは『イドメネウス』の翻訳に関してさらに2通の手紙を送っている。Lettres au marquis Francesco Albergati Capacelli, 27 octobre 1762 et 29 juillet 1765, *GC*, t. VI, p. 1099 et t. VIII, p. 147.

156) Lettre à Michel-Paul-Guy de Chabanon, 1<sup>er</sup> février : Lettre à Anne-Madeleine-Louise-Charlotte-Auguste de La Tour du Pin de Saint-Julien, 19 mai 1773, *GC*, t. XI, p. 230 et 353.

157) Lettre au baron Friedrich Melchior von Grimm, 1<sup>er</sup> novembre 1770, *GC*, t. X, p. 462.

ゴート族とバンダル族の戯曲がさらに洗練されていない演劇によって  
従われたのです<sup>158)</sup>。

よくこれほどまでに糾弾の言葉を連ねることができるものだと、むしろ彼の批判的精神の辛辣さには愕然とするものがあるが、ヴォルテールは野蛮を象徴する西ゴート族ととりわけ芸術品の破壊者を表すバンダル族という未開民族を持ち出して、クレピヨンの悲劇が未発達な粗野な作品であるということを強調している<sup>159)</sup>。そしてこの非難にも見られるように、彼はこのような悲劇をしばしば「洗練」という言葉を用いて対比させている。だがヴォルテールがこの語を使用する時は、筋などの劇作術に対してではなく、とりわけ文体などの作詩法を対象としており、絶えず彼はクレピヨンの韻文詩が洗練されていないことを強調していたので

---

158) *Questions sur l'Encyclopédie [Dictionnaire philosophique : 1771]*, art. « Langue française », *M*, t. 19 [1879], p. 194.

159) クレピヨンの韻文詩や彼の作品、彼の擁護者を非難する時、ヴォルテールは好んで「西ゴート族」(Lettre à Mme Denis, 11 août 1750, *GC*, t. III, p. 213 ; Lettre à Marie-Élisabeth de Dompierre de Fontaine, 31 janvier 1755, *GC*, t. IV, p. 366 ; Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 19 décembre 1770 : Lettre au marquis de Thibouville, 15 novembre 1771 : Lettre à Jean-François de La Harpe, 25 février 1772, *GC*, t. X, p. 527, 870 et 960)、「バンダル族」(Lettres au marquis de Thibouville, 15 avril 1752 et 20 février 1771, *GC*, t. III, p. 665 et t. X, p. 631 ; Lettre à la comtesse d'Argental, 11 janvier 1771, *GC*, t. X, p. 580) だけでなく、「ゴート族」(Lettre au marquis de Thibouville, 15 avril 1752, *GC*, t. III, p. 665 ; Lettre au comte d'Argental, 28 juin 1756, *GC*, t. IV, p. 800)、「東ゴート族」(Lettre au marquis de Ximénès, 13 février 1755, *GC*, t. IV, p. 382 ; Lettre au comte d'Argental, 9 mai 1772, *GC*, t. X, p. 1030)、「アロブログス族」[ドーフィネ地方とサヴォワ地方に住んでいたガリア人の一族](Lettres au duc de Richelieu, vers le 31 août 1750 et 26 août 1773, *GC*, t. III, p. 231 et t. XI, p. 445 ; Lettres au comte d'Argental, 13 juillet 1751, 8 janvier 1752 et 6 février 1755, *GC*, t. III, p. 440, 577 et t. IV, p. 369 ; Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 19 décembre 1770, *GC*, t. X, p. 527) という未開民族名やその形容詞を用いている。

ある<sup>160)</sup>。それから3年後の1774年にも彼は、「『エステル』の50行の韻文詩は、クレビヨンの雑然とした山を全部集めても比較にならないほど優れているのです<sup>161)</sup>」と2人の劇作家を比較している。しかしながらヴォルテールにおいて両者の詩の評価の差はどこから来ているのであろうか？その違いについて彼は言っている。

誤用、不純正語法、誇張され勿体ぶった理解のできない文体が、ラシーヌ以来舞台を浸しています。彼こそが絶えず優雅な言い回しによって永久にそれらを追放していたように思われました。人は次のことを包み隠すことはできません。『エレクトラ』ととりわけ『ラダミストゥス』の幾つかの断片を除いて、この著者の残りの全ての作品は、耳に逆らう韻文詩でもって行き当たりばつりに投げられた誤用、不純正語法の塊なのです<sup>162)</sup>。

ヴォルテールはクレビヨンの詩の価値を多少は認めながらも、彼の文体をラシーヌに照らし合わせ非難している。そしてこの批判には「耳に逆らう」という言葉が見られるが、これは韻文詩の耳に快く響く「ハーモニー（調和）」のことを彼は指している。この要素こそがラシーヌとクレビヨンの韻文詩の間に横たわる厚い障壁だと思われる。ヴォルテールはライバルの韻文詩を非難しながら、同時に自分の作詩法に関する見解も示していた。

常に正しく、調和がとれ、表現力を持った作詩法なくして成功はあ

---

160) Voir *Lettres aux comte et comtesse d'Argental*, 13 juillet 1763 et 1<sup>er</sup> mai 1764, *GC*, t. VII, p. 303 et 677 ; *Lettre au marquis de Thibouville*, 6 février 1771, *GC*, t. X, p. 612.

161) *Lettre à Jean-François de La Harpe*, 11 décembre 1774, *GC*, t. XI, p. 877.

162) *Questions sur l'Encyclopédie [Dictionnaire philosophique]*, art. « Langue française », *M*, t. 19, p. 192.

りません。[…]『カティリーナ』にはこの言語の純正さと洗練さが絶対的に欠けているのです。この戯曲にはいくつかの力強い韻文詩もありますが、言葉に対する過ちがなく、この洗練さが犠牲にされていないような詩は続けて10行ともないのです<sup>163</sup>。

ここでは作詩法に必要な不可欠な要素が列挙され、その中に「調和」も組み込まれているが、それでもやはりヴォルテールはこの要素を韻文には欠かすことができないものとして絶対視していた。というのも彼におけるハーモニーに対する重要性は、1725年からすでに絶えず主張されてきたからである。彼は言っている。「韻文で書かれた全ての作品は、他の所でどれほど美しいものであっても、もし全ての韻文が […] ハーモニーに満たされていないのであれば、必ずや煩わしいものとなるでしょう<sup>164</sup>。」この主張ののちラシーヌがこの要素を重要視していたということが強調されているが、彼は『オイディプス』の再版の際の1730年にも繰り返している。「地上全体を魅了するもの、それはこの困難な韻律から生まれるハーモニーなのです<sup>165</sup>。」ここではハーモニーを生み出すためには韻文という脚韻が必要であるということが指摘されている。43年後の1773年には、再びヴォルテールはラシーヌに言及しながら言っている。「全ての詩が耳に心地よい調べを奏でますよう。絶対に必要な功績なのです。それがなければ、詩は決して怪物でしかありません<sup>166</sup>。」ヴォルテールにおいては耳に快いハーモニーこそが韻文には不可欠なものであったのである。さらに彼が没する2か月前に、ラシーヌの韻文詩を批判したイギリス人のモンターグ夫人に次のように反論している。「もし彼女の耳が、全てのヨーロッパの悲劇において、ラシーヌにおいてしか見出されない

163) Lettre à Frédéric II, 17 mars 1749, *GC*, t. III, p. 33.

164) *Hérode et Mariamne*, « Préface », *OC*, t. 3 C, p. 187.

165) *Œdipe*, « Préface » [1730], éd. David Jory, *OC*, t. 1 A, p. 281.

166) *Les Lois de Minos*, « Épître dédicatoire à Monseigneur le duc de Richelieu » [1773], éd. Simon Davies, *OC*, t. 73 [2004], p. 78.

人を魅了するこのメロディーに慣れたのであれば、モンターグ夫人は考えを改めることでしょう<sup>167)</sup>。」ここで重要なことは、彼においてはこのハーモニーを奏でる詩を作ることができるのは、ラシーヌただ1人だけであるということなのである。したがってヴォルテールが批判しているのはクレビヨンだけに限ったことではなく、また彼がライバルの韻文詩を非難したとしても、それは彼の批判を通してフランス悲劇全体に対してなされたものと推察できる。何より彼の最大の目的は、韻文詩という伝統的な自国の遺産を守るためだったのである。この問題はフランス語と悲劇との結びつきを重要視していた彼の態度に大きく関わっている。それでは最後に、この事実を明らかにするためクレビヨンの韻文詩に対する批判を別の角度から眺めたい。

1762年にヴォルテールはダルジャンタル侯爵夫妻に次のように疑問を投げかけていた。「ジョリオ・ド・クレビヨンがよい詩人と見なされているのは本当なのでしょうか<sup>168)</sup>？」もちろんヴォルテールにとってその答えは否である。だがライバルがこのように評価されることに対して懸念する理由が彼にはある。それは批判となってこう表されている。「私の戦争はクレビヨンという名の西ゴート人がフランスの韻文詩で悲劇を作ったと、これは本当のことではありませんが、そう主張するアロプロゲス族 [=クレビヨンの支持派] に対してなのです。それはフランスの栄光に関わることなのです<sup>169)</sup>。」再び未開の蛮族を例にクレビヨンの詩が咎められているが、それよりも悲劇とフランス語との関係がここでは強調されている。もともとヴォルテールはこの結び付きを1746年に「我々の言語を外国人が尊敬するようにしたのはコルネイユただ一人だけでした」と表明し、30年経ったのちも「我々の言語で本当に美しい作品を最初に

---

167) *Irène*, « Lettre de Monsieur de Voltaire à l'Académie française » [1778], éd. Perry Gethner, *OC*, t. 78A [2010], p. 109.

168) Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 8 août 1762, *GC*, t. VI, p. 1009.

169) Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 19 décembre 1770, *GC*, t. X, p. 527.

作ったのはコルネイユであるということは確かなことなのです」と繰り返している<sup>170)</sup>。つまりヴォルテールは17世紀の悲劇の韻文詩こそがフランス語を確立したと捉え、それをコルネイユの功績として称賛していたのであった。したがって彼においてはコルネイユ、ラシーヌといった17世紀の劇作家の詩に値しないような韻文詩は、フランス語とは見なされないのである<sup>171)</sup>。同時にこのような詩は、フランスを栄光へと導いた悲劇を辱めるものであり、最終的にそれは国民の榮譽に関わることだと彼は主張するに至る。ヴォルテールはクレビヨンに触れながら25年前にすでに言っていた。「対話は子供じみた美辞麗句、粉飾しすぎた愚かさ、[...] あらゆる種類の不適切さで満たされている中断された言葉だけでなく、フランス語の韻文詩が10行もありません。[...] それは国民にとっては恥辱です<sup>172)</sup>。」ヴォルテールにとっては、フランス語を確立した悲劇の韻文詩の榮譽が汚されることは、国民全体が辱められるのと同じことなのである。したがってこれほどまでにクレビヨンの韻文詩がヴォルテールの非難の対象となるのは、もちろんライバルの話すフランス語に問題があるからなのだ。彼は『カティリーナ』を執筆するクレビヨンのことを、「彼はフランス語で書くことに、十二分の注意を払うことを怠って

---

170) *Discours de M. de Voltaire à sa réception à l'Académie française*, OC, t. 30A, p. 28 ;

Lettre à Pierre Fulcrand de Rosset, 22 avril 1774, GC, t. XI, p. 663. ヴォルテールは至る所でフランス語へのコルネイユの寄与を讃えている。Lettre à Jean-Jacques Dortous de Mairan, 16 août 1761, GC, t. VI, p. 516 ; *Commentaires sur Corneille*, « Avertissement » et « *Œdipe* », OC, t. 54 (II) , p.1 et t. 55 (III) , p. 808 ; *Irène*, « Lettre de Monsieur de Voltaire à l'Académie française », OC, t. 78A, p. 102.

171) そういう訳でクレビヨンの功績がコルネイユとラシーヌに並置された時にも、彼の文体がラシーヌの文体よりも流暢で滑らかであるという評価がなされた時にも、ヴォルテールは憤りを隠せなかった。Lettre à Jean-François Marmontel, 1<sup>er</sup> novembre 1769, GC, t. X, p. 31 ; Lettre à Jean de Vaines, 8 mai 1775, GC, t. XII [1988], pp. 133-134.

172) Lettre à Mme Denis, janvier 1749, GC, t. III, pp. 13-14.

はおりません<sup>173)</sup>」と皮肉っている。つまり彼の場合劇作云々よりも、先ずはフランス語を書くことから始めなければならない、ということである。またヴォルテールはライバルのことを、「今までにほとんどフランス語を話したことの無い大仰で空疎なできの悪い詩人<sup>174)</sup>」とまで辛辣に形容している。だがクレビヨンのフランス語に対するヴォルテールの非難は止まることを知らない。今度は自分の作品を採り上げながらこう述べている。「私は『アトレウス』を再読いたしました。それは私には常識と文法と詩の墓場に思われました。人々はそれを僅かばかりの才能を持ち、我々の言語を不十分に習ったバンダル族の作品であると信じることでしよう<sup>175)</sup>。」この「我々の言語」という表現から、あくまでもヴォルテールはクレビヨンの使うフランス語を外国人が学んだ言語と見なしている、ということが見て取れる。ライバルの話すフランス語は、彼にはとうていフランス人の話す母語とは思われなかったのである。最後にヴォルテールは別の文通相手に問いかけている。

彼 [=クレビヨン] の『ラダミストゥス』と、愚かにも間抜けなイティスに恋をする『エレクトラ』においてさえ、美しい箇所はあります。しかしクレビヨンはフランス語を話しているのでしょうか？ 『カティリーナ』、『クセルクセス』、『ピュロス』、『セミラミス』の蛮人で

173) Lettre à la marquise du Deffand, 20 juillet 1751, *GC*, t. III, p. 446.

174) Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 25 avril 1763, *GC*, t. VII, p. 216. ヴォルテールはしばしばクレビヨンに対して「大仰で空疎」(Lettre à Claude-Philippe Fyot de La Marche, 9 juillet 1762, *GC*, t. VI, p. 964 ; Lettre à Jean-François de La Harpe, 25 mai 1764, *GC*, t. VII, p. 717) と形容している。さらに彼を呼ぶ時の他の表現としては、紀元前4世紀のギリシア詩人から取った「くどくどと話す [ハルキスの] リュコプロン」(Lettre au comte d'Argental, 13 août 1755, *GC*, t. IV, p. 517) や、ヴォルテール自身とクレビヨンを並列して「疫病神」(Lettre au comte d'Argental, 4 décembre 1754, *GC*, t. IV, p. 296) と呼んでいる。

175) Lettre à la comtesse d'Argental, 11 janvier 1771, *GC*, t. X, pp. 579-580.

ある著者は、礼儀正しい人々にいつの日か引用されるようなことがあるのでしょうか<sup>176)</sup>？

ヴォルテールはライバルの戯曲に対して「引用される」という言葉を用いている。彼の中ではこの言葉は重要な意味を持ち、それは悲劇の韻文詩とフランス語教育という問題に大きく関わっているのである。彼は1764年に韻文詩の教育の必要性を説いている。

クレピヨンや彼と同じくらい筋の運びの悪い悲劇や、生硬で誤用が詰め込まれた韻文詩を作った全ての者どもが、フランス人を無知蒙昧な人間に変えてしまったとあなたは確信しておられるようですね。[...] 無知で能力の乏しい民衆、彼らは少数の啓蒙された人々に導かれる必要があるのです<sup>177)</sup>。

そして5年後には演劇に対し民衆も正しい評価が多少できるようになったと認めてはいるものの、それでもヴォルテールにはまだ足りないのであって、時間をかける必要性を説いている<sup>178)</sup>。彼は没する数か月前に『ア

---

176) Lettre à Adrien-Michel-Hyacinthe Blin de Sainmore, 7 septembre 1764, GC, t. VII, p. 835. さらにヴォルテールは自分をスイス人と見なし、クレピヨンの『三頭政治』に登場する人物を引用しながら、「我々スイス人はキケロとオクタヴィアヌスよりも上手にフランス語を話します」と述べていた。Lettre au comte d'Argental, 6 février 1755, GC, t. IV, p. 369.

177) Lettre à Nicolas-Sébastien Roch de Chamfort, mars 1764, GC, t. VII, p. 624. ヴォルテールは15年ほど前にこう述べていた。「少なくとも筋がうまく運ばれ見事に書かれた作品と、彼女 [= ポンパドゥール夫人] が擁護していたアロブゲロス族の笑劇の間にはいくつかの違いがある、ということをおあなたが彼女に気づかせてあげるとはよいことなのです。」Lettre au duc de Richelieu, vers le 31 août 1750, GC, t. III, p. 231.

178) Lettre à Henri-Louis Lekain, 27 janvier 1769, GC, t. IX, p. 768. 以前にもヴォルテールはよい作品と時の経過が人々の目を開かせることを期待していた。Lettre au



カデミー辞典』に対し提案を述べている。

我々の優れた著者から取られた引用は永遠の規則の代わりにします。そして我々はこの1冊の辞書だけで民衆が要求する文法、修辭法、詩を網羅するができてしまうでしょう。私が憚らず付け加えたいこと、それはもしあなた方が今日私が起案したことを認めて下さるのでしたら、明日にでも始めなければならないということです<sup>179)</sup>。

ヴォルテールにとって優れた劇作家の韻文詩の引用集は、教材としてそれだけでフランス語を学ぶには充分であったのだ。したがって、彼がクレビヨンの詩を非難するのも個人的な攻撃というよりは、フランス語の向上のためだったと考えられる。83歳のヴォルテールは自分自身の悲劇を引用し、アカデミー会員らに向かってこう訴えている。

私は今日『イレヌ』の悲劇で私が陥った過ちについてあなた方に遠慮なく意見を求めます。[...]年を取ると矯正しがたいものだと思われています。しかし私は、皆さん、人は100歳でも自己を修正することを欲しなければなりません。いかなる歳でも自らに天分を与えることはできませんが、いくつになっても人は自分の誤りを正すことはできるのです。恐らく、この方法こそがフランス語を脅かしているように思われる頽廢から、フランス語を守ることができる唯一の方法なのです<sup>180)</sup>。

ここでは普段から批判しているクレビヨンのことではなく、自らの過ち

---

comte d'Argental, 13 novembre 1751, *GC*, t. III, p. 505 ; Lettre au duc de Richelieu, 27 mai 1767, *GC*, t. VIII, p. 1152.

179) *Projet de dictionnaire présenté à l'Académie* [1778], éd. Jerom Vercurysse, *OC*, t. 80C [2009], p. 420.

180) Irène, « Lettre de Monsieur de Voltaire à l'Académie française », *OC*, t. 78A, p. 98.

をも素直に認め、自分のフランス語について助言を求める姿勢をヴォルテールははっきりと見せている。最後に彼はこう胸の内を明かしていた。

私は、ルイ14世の偉大な世紀のもとで高められ、アテネとあらゆる国民の演劇に対して優位に立つフランスの舞台が、私が亡き後に生命を吹き返し、私がそこにもたらした全ての過ちを取り除き、そして私ができることができなかつた美しさを獲得することを願っております<sup>181)</sup>。

この謙虚な態度こそフランス語を栄光へと導いた悲劇を存続させなければならぬ、というヴォルテールの願いなのであった。

## VI. おわりに

以上、クレビヨンの劇作術と韻文詩に対するヴォルテールの批判を見た。確かに彼の非難を並べてみると、とりわけ2人の間で確執が始まった後にヴォルテールによる攻撃が突如としてなされたという強い印象を受ける。もちろんそこにはクレビヨンに対する個人的な恨みや嫉妬も相当大きく働いていたことは間違いない。しかしながらヴォルテールが咎めていたことは、仲違いをする以前からすでに彼の中には存在していたのである。また彼はクレビヨンの評価すべき作品には素直にその価値を認めていたし、同時に自分に対しても厳しい批判の目を向けてもいた。つまりヴォルテールの非難はクレビヨンという個人に対してなされた攻撃というよりも、あくまでもフランス悲劇への批判の延長上にあったのだ。したがってクレビヨンになされた彼の批判は、決して価値のないものではない。不幸にも彼はヴォルテールの攻撃の的になってしまったが、それは全てフランスの財産である伝統的な悲劇の栄光を取り戻そうと願うヴォルテールの切なる思いの表れだったのである。こうした態度にク

---

181) *Les Lois de Minos*, « Épître dédicatoire à Monseigneur le duc de Richelieu », *OC*, t. 73, p. 77.

レビヨンに対するヴォルテールの批判の本当の意味があったと思われる。  
(本学非常勤講師)

【補足：クレビヨン悲劇における主な登場人物】

1) 『イドメネウス』(1705年)

イドメネウス	クレタ王。イダマントの父親。エリグゼーヌを愛している。
イダマント	イドメネウスの息子。エリグゼーヌの恋人。
メリオン	エリグゼーヌの父親。
エリグゼーヌ	メリオンの娘。イダマントの恋人。

2) 『アトレウスとテュエステス』(1707年)

アトレウス	アルゴス王。テュエステスの兄。アエロペの夫。
テュエステス	ミュケナイ王。アトレウスの弟で、兄の妻アエロペの愛人。
プリステーナ	テュエステスとアエロペの息子だが、アトレウスの息子と 思われていた。テオダミーの兄であり、恋人。
テオダミー	テュエステスの娘。プリステーナの妹であり、恋人。

3) 『エレクトラ』(1708年)

エレクトラ	クリュタイムネストラとアガメムノンの娘。オレステスの 姉。イティスの恋人。
オレステス	クリュタイムネストラとアガメムノンの息子で、エレクト ラの弟。ティデの名で育てられ、オレステスであることを 本人は知らない。イピアナッサの恋人。
クリュタイムネ ストラ	アガメムノンの元妻で、現在はアイギストスの妻。エレクト ラとオレステスの母親。
アイギストス	アガメムノンの殺害者で、クリュタイムネストラの夫。イ ティスとイピアナッサの父親。
イティス	アイギストスの息子でイピアナッサの兄。エレクトラの恋人。
イピアナッサ	アイギストスの娘でイティスの妹。オレステスの恋人。

## 4) 『ラダミストゥスとゼノビア』 (1711年)

ファラスメナス	イベリア王。ラダミストゥスとアルサームの父親。ゼノビアを愛している。
ゼノビア	ラダミストゥスの妻。イスメニーの名で通っている。
ラダミストゥス	アルメニア王。ファラスメナスの息子でアルサームの兄。ゼノビアの夫。
アルサーム	ファラスメナスの息子でラダミストゥスの弟。ゼノビアを愛している。

## 5) 『クセルクセス』 (1714年)

クセルクセス	ペルシア王。ダレイオスとアルタクセルクセスの父親。
ダレイオス	クセルクセスの長男でアルタクセルクセスの兄。アメストリスの恋人。
アルタクセルクセス	クセルクセスの次男でダレイオスの弟。アメストリスを愛している。
アメストリス	ペルシアの王族の娘。ダレイオスの恋人。
アルタバシ	クセルクセスの大臣。謀反の長。バルシーヌの父親。
バルシーヌ	アルタバシの娘。ダレイオスを愛している。

## 6) 『セミラミス』 (1717年)

セミラミス	バビロニア王妃。ニニユスの未亡人。ニニアスの母親でありながら、彼を一人の男性として愛している。
ニニアス	セミラミスとニニユスの息子で、ベリユスの甥。アジェノールの名で育てられる。テネジスの恋人。
ベリユス	セミラミスの弟で最終的に姉を罰する。テネジスの父親。
テネジス	ベリユスの娘で、セミラミスの姪。ニニアスの恋人。

## 7) 『ピュロス』 (1726年)

グラウシアス	イリュリア王。ピュロスとイリリュスの父親。
ピュロス	エピロス王。グラウシアスの息子でイリリュスの兄。ヘレニユスの名で育てられる。エリシーの恋人。
イリリュス	グラウシアスの息子でピュロスの弟。エリシーを愛している。
ネオプトレモス	エピロスの篡奪者。エリシーの父親。
エリシー	ネオプトレモスの娘。ピュロスの恋人。

## 8) 『カティリーナ』(1748年)

キケロ	ローマの執政官で雄弁家。テュリーの父親。
テュリー	キケロの娘。カティリーナの恋人。
カティリーナ	ローマ元老院議員。陰謀の長。テュリーの恋人。

## 9) 『三頭政治、あるいはキケロの死』(1754年)

キケロ	ローマの執政官で雄弁家。テュリーの父親。
テュリー	キケロの娘。セクステウス・ポンペイウスの恋人。
セクステウス・ ポンペイウス	ポンペイウスの息子。クロドミールの名で身を隠している。 テュリーの恋人。
オクタヴィアヌス	執政官の1人。カエサルの子。フルウィアと結婚している が、テュリーを愛している。